

クロスロード

8



2020 AUGUST

特集

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

派遣国の横顔

～ネパール～



現在の派遣国数

73 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2020年6月末現在、単位：人)

※新型コロナウイルスの感染拡大により、
派遣中隊員は全員一時帰国中です。

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	45	2
エスワティニ	1	
エチオピア	16	
ガーナ	45	
ガボン	14	3
カメルーン	21	2
ケニア	34	3
ザンビア	49	5
ジブチ	9	
ジンバブエ	8	
セネガル	37	1
タンザニア	56	2
ナミビア	11	
ベナン	33	
ボツワナ	16	
マダガスカル	28	
マラウイ	27	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	29	1
ルワンダ	36	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	20	
インドネシア	12	1
ウズベキスタン	19	5
カンボジア	18	2
キルギス	27	
タイ	15	4
タジキスタン		2
中華人民共和国	10	
ネパール	32	4
東ティモール	33	
フィリピン	24	2
ブータン	15	4
ベトナム	26	9
マレーシア	13	5
ミャンマー	14	
モルディブ	7	
モンゴル	35	
ラオス	36	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	2	
サモア	13	1
ソロモン	16	1
トンガ	14	
バヌアツ	23	
パプアニューギニア	20	1
パラオ	9	5
フィジー	19	3
マーシャル	7	2
ミクロネシア	12	4

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	2

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	14	1
チュニジア	6	
モロッコ	19	2
ヨルダン	35	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		13	6	5
エクアドル	32	2		
エルサルバドル	13			
キューバ		1		
グアテマラ	16	1		
コスタリカ	23	5		
コロンビア	14	5		
ジャマイカ	20	2		
セントビンセント	3			
セントルシア	7			
ドミニカ共和国	27		4	1
ニカラグア	2			
パナマ	13	2		
パラグアイ	27	2	5	2
ブラジル			69	12
ベリーズ	13			
ペルー	36	5		
ボリビア	26			1
ホンジュラス	19			
メキシコ	2	5		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,385 (583/802)	127 (96/31)	84 (33/51)	21 (8/13)	1,617 (720/897)
累計 (男性/女性)	45,776 (24,302/21,474)	6,553 (5,298/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,418 (30,449/23,969)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 AUG
Contents

■職種別索引 掲載ページ

コミュニティ開発	8、14、16、24
林業・森林保全	12
建設機械	22
マーケティング	20
観光	32
シンクロ (現・アーティスティックスイミング)	23
バドミントン	33
理科教育	18
数学教育	10
体育	4
幼児教育	28
栄養士	26
公衆衛生	36
障害児・者支援	6

■国別索引 掲載ページ

インドネシア	23
エジプト	4
エチオピア	32
ケニア	20
サモア	18
ジャマイカ	10
セネガル	14
チリ	4
ドミニカ共和国	33
ネパール	6、8、36
パプアニューギニア	16
フィリピン	29
ブータン	22
ベネズエラ	12
マラウイ	24

■出身都道府県別索引 掲載ページ

北海道	32
山形県	24
栃木県	6
東京都	33
神奈川県	10
長野県	12
滋賀県	22
京都府	23
兵庫県	16
岡山県	14
香川県	20
長崎県	8
沖縄県	18

【凡例】

JICA海外協力隊の方々(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類(呼称)は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株)AND

レイアウト：(株)AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' Reports

- ▶チリ障害者スポーツの縁の下の力持ちとしてチリと日本の懸け橋に!(チリ)
- ▶幼児教育にかかわる隊員たちが派遣国に向けた教材アイデア集を作成(エジプト)

派遣国の横顔

～ネパール～

6

障害者支援

浅見明子さん(障害児・者支援・2017年度1次隊)

8

収入向上

高木郁絵さん(コミュニティ開発・2016年度1次隊)

特集

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

10

教育

古田優太郎さん(ジャマイカ・数学教育・2016年度1次隊)

12

林業

荒井里佳子さん(ベネズエラ・林業・森林保全・2014年度1次隊)

14

アパレル業

田賀朋子さん(セネガル・コミュニティ開発・2014年度2次隊)

16

飲食業

内藤直樹さん(パプアニューギニア・コミュニティ開発・2013年度4次隊)

18

私の引継書

城間梓沙さん(サモア・理科教育・2017年度3次隊)

20

“失敗”から学ぶ

塩田真也さん(ケニア・マーケティング・2017年度3次隊)

22

希少職種図鑑

▶建設機械 吉川隼人さん(ブータン・2017年度2次隊)

▶シンクロ(現・アーティスティックスイミング) 石山紗江さん(インドネシア・2017年度4次隊)

24

JICA Volunteers' Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

自然エネルギー機材を扱う企業の社員 佐藤博亮さん(マラウイ・コミュニティ開発・2015年度3次隊)

26

帰国後よもやま話

栄養士隊員篇

28

Pick Up OB・OG会

▶青年海外協力隊幼児教育ネットワーク

▶協力隊フィリピンOB/OG会

30

JICA海外協力隊的プチテクガイド

好きな布でネクタイをつくろう! / 手洗いの啓発活動 / 保存食づくりに挑戦

32

先輩隊員のシューカツ記

インパック株式会社社員 鈴川雅未さん(エチオピア・観光・2016年度3次隊)

33

JOCV SPORTS NEWS

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「寝具」

35

INFORMATION

36

隊員めし

ニンニク多めの野菜炒め 中国東北地方の「地三鮮」



宮城県加美町で行われたパラリンピックホストタウン調印式。前列右から、チリパラリンピックカヌー選手の2人、チリパラリンピックカヌー監督、チリパラリンピック委員会事務局長。2列目の右から2人目が横川さん

支援活動の流れ	
(2016年1月) 派遣	シニア海外ボランティア(長期)としてチリへ赴任。
(2018年9月) 視察	東京オリ・パラホストタウン担当のチリ現地調査。その後、チリパラリンピックホストタウンが「宮城県加美町」に決定。
(2019年1月) 帰国	任期満了。
(2019年2月22日～26日) チリ代表選手団来日	パラリンピックホストタウン調印式のため来日。全日程ボランティアとして同行。
(2019年7月) 派遣	シニア海外協力隊(短期)として再度赴任。
(2020年3月) 一時帰国	新型コロナウイルス感染症拡大のため一時帰国。
(2020年4月) 情報交換	加美町との情報交換を再開。
(2020年6月) 任期終了	任期満了。

チリ障害者スポーツの縁の下の力持ちとして チリと日本の懸け橋に!

Chile
Japan

文 = 横川信子さん(シニア海外協力隊<短期> / チリ・体育・2019年度派遣)



一時帰国中に配属先に対して発信した「ホストタウン加美町の紹介」や「障害者の家でできるトレーニング」など

から私のこ
とが加美町
へ伝わり、私
の「チリと
の懸け橋に」
という思い
が実現しま
す。4泊5

日全日程をボランティアとして同行させてもらいました。移動や宿泊でハプニングはありましたが、それを一緒に乗り越え、無事に調印式を終えました。チリの選手団から「あなたが傍にいたからリクエストも言え、日本にも加美町にも親しみを覚えた」と言われ、思いが小さな実を結びました。

(19年7月にシニア海外協力隊<短期>として再度チリに派遣され、20年3月に一時帰国。私自身気持ちの整理がつかない状況でしたが、オンライン会議への参加や障害者水泳チームの「家でできるトレーニング」の作成とオンライン指導など、配属先が必要とし、私ができることを試行錯誤しながら活動を継続。6月に任期を満了しました。

東京オリ・パラの開催は1年延期となりましたが、私がチリのパラリンピック選手たちとホストタウンを応援し続けたいという気持ちが変わりません。今までのチリでの経験や感謝の気持ちを国内へ還元するためにも、つながりのできた加美町スポーツ推進室との情報交換を再開。代表選手の近況を伝えたり、加美町の紹介をスペイン語で発信したりするなど、状況を見守りながら今の自分のできる活動をしています。

チリのカヌー、陸上、卓球、パワーリフティングの選手は、既にパラリンピック出場が決定しています。20年3月、加美町と共に東京都三鷹市も事前キャンプ受け入れが決定。今後も「東京オリ・パラでチリと日本の懸け橋に! チリ障害者スポーツの縁の下の力持ちに!」という夢に向かって活動をしていきたいと思えます。

* 派遣名称は派遣当時のものです。

子どもの発達を促す玩具一例	
作品	目的・特徴
紙じゅうたん	適度な難易度で手先を使い、集中力を促す。
手洗い動画	ハッピーバースディの歌を歌いながら、正しい手洗いの方法を学ぶ。
形パズル	遊びながら形を学べる。
リトミック動画	音に合わせて楽しく体を動かすことでリズム感を養う。物になりきることで、想像力や表現力を育てる。
吹きゴマ	廃材を利用した動く玩具。



リトミック動画の様子。アヒルになりきって体を動かす田中さん
上記動画や教材はFacebookページから見ることができます
▶ <https://www.facebook.com/104615964600655/>



幼児教育にかかわる隊員たちが 派遣国に向けた教材アイデア集を作成

Egypt
Japan

文 = エジプト教材研究分科会(渡辺 杏さん<青少年活動・2018年度1次隊>、神崎早紀子さん<学校保健・2018年度2次隊>、たの野龍也さん<障害児・者支援・2019年度1次隊>、田中 葵さん<障害児・者支援・2019年度2次隊>、橋本千鶴さん<幼児教育・2019年度2次隊>)

幼児教育にかかわるエジプト派遣の隊員5人(幼児教育、学校保健、障害児・者支援、青少年活動)で、2月に「教材研究分科会」を結成しました。この分科会の目的は、各隊員たちが配属先で実践している教材の情報共有や、子どもの発達を促す玩具について専門領域を生かした教材研究を行うことです。結成したのも束の間、新型コロナウイルス感染症の影響で、日本へ一時帰国することとなりました。帰国後、エジプトの子どもたちに向けて、日本からできる活動はないかと考え、分科会メンバーとオンライン会議を始めました。

現在、エジプトは新型コロナウイルス感染症の影響で、幼稚園、保育園、学校、施設が閉鎖になり、子どもたちと保護者たちは自宅での生活を余儀なくされています。「子どもたちに遊びを通して楽しい時間を過ごしてほしい」「子どもと保護者が一緒に遊んでほしい」という思いから、「教材アイデア集」のTeabooks(以下、FB)ページを制作することを決めました。

FBページで紹介する教材は、どれも幅広い分野の隊員がそれぞれの専門性を生かし、協力して制作したものです。子どもを対象とした工作や動画の紹介だけでなく、配属先の職員や保護者へ向けて「遊びを通した学び」を知ってもらうために、「手づくりパズル」や「パネルシアター」などの教材も紹介しています。また、新型コロナウイルス感染症が拡大する状況の中で、感染を防止するためや健康を気づかうために、「食育・健康・衛生」に関して

教材研究分科会メンバーのFacebookページ制作への思い

- JICAエジプト事務所の尾田企画調査員(ボランティア事業)。また同事務所スタッフのアミーラさんも協力した
- 「任地で子どもたちと一緒に実践したかった教材を紹介しています」(田中葵さん)
- 「コロナを予防するために手洗いや、免疫力を高めるための食育の教材を知ってもらいたいです」(神崎早紀子さん)
- 「実際に活動してきたなかで、子どもたちが夢中になっていた遊びをお伝えしています」(渡辺杏さん)
- 「日本の遊びやお話に興味をもってほしいという思いで、お話し・手遊びなどを発信しています」(橋本千鶴さん)
- 「エジプトにもある材料を利用して形を学ぶ教材や指先を使いながら数を数える教材、色を覚える教材をつくっています」(立野龍也さん)

子どもたちが簡単に実践でき、楽しく学べる教材として、「正しい手洗いを歌いながら学べる動画」なども投稿しています。

今後は、現地職員や各配属先のカウンセラーと協力しながら、子どもたちに届く持続可能な活動をしていきます。また、つくり上げたFBページにおける教材のアイデア集が後輩隊員の活動に少しでも役に立つよう願っています。

派遣国の 横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。



Field 1

障害者支援



あさみあきこ
浅見明子さん
(障害児・者支援・2017年度1次隊)

PROFILE

1984年生まれ、栃木県出身。体育大学を卒業後、2012年に脊髄損傷専門のトレーニングジムを運営するジェイ・ワークアウト(株)に入社し、トレーナーとして勤務。17年7月に青年海外協力隊員としてネパールに赴任(現職参加)。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

障害者スポーツ「ボッチャ」の普及に取り組むネパールボッチャ協会(カトマンズ市)に配属され、同競技に関する主以下の活動に従事。

- 競技の普及
- 指導者の育成
- 大会の開催

障害の程度を問わずに 取り組むことができる スポーツの普及を支援

障害の程度を問わず、幅広い身体障害者がプレーできる障害者スポーツの「ボッチャ」。その普及支援に取り組んだ浅見さんは、障害者への偏見をなくすため、健常者への普及にも力を入れた。

浅見さんが配属されたのは、「ボッチャ」という障害者スポーツの普及に取り組むネパール・ボッチャ協会。ボッチャとは、直径10センチ程度のボールを投げたり転がしたりして、的とするボールにどれだけ近づけたかを競う競技だ。試合は通常、障害の種類や程度によって細かなカテゴリー分けをして実施され、重い障害のカテゴリーでは「滑り台」のような補助具を使ったり、アシスタントを使ったりしてボールを操ることが認められている。そのため、障害の程度がどれほど重い人でも楽しめるのが特徴となっている。そこに感銘を受け、ネパールにボッチャを広めようと10年

前に協会を立ち上げたのが、ボッチャ協会会長を務める女性だ。彼女がボッチャの存在を知ったのは、JICAの研修で障害者スポーツについて学んだ際、彼女が孤軍奮闘で普及に取り組んできたものの、思うような成果が上がらなかったなか、それを支援する役目で派遣された協力隊員が浅見さんだった。

「ボッチャ検定」を導入

浅見さんの活動の柱となったのは「巡回指導」である。特別支援学校5校と障害者の宿泊施設1カ所を、それぞれ週に1度ずつ訪問

し、毎回1時間ほどボッチャの指導をした。対象者の人数は、少ない所で10人程度、多い所で50〜60人という規模だった。

浅見さんは当初から、帰国後に競技が途絶えてしまうことのないよう、特別支援学校の教員たちにもボッチャの指導ができるようになってもらおうと考えていた。そうして、彼らにルールや基本的な技術をひととおり伝え終えると、浅見さんが訪問しない日には彼らが指導者となって練習をさせてほしいと依頼。しかし、彼らは「わかった」と返事をするものの、それを実践している様子が一向に見られなかった。その理由がようやくわかったのは、着任して半年ほど経ったころ。彼らには「スポーツの練習をした経験がなく、浅見さんが行う指導を見ても、どこをどう真似れば良いかがわからなかったのだった。

浅見さんは当初から、帰国後に競技が途絶えてしまうことのないよう、特別支援学校の教員たちにもボッチャの指導ができるようになってもらおうと考えていた。そうして、彼らにルールや基本的な技術をひととおり伝え終えると、浅見さんが訪問しない日には彼らが指導者となって練習をさせてほしいと依頼。しかし、彼らは「わかった」と返事をするものの、それを実践している様子が一向に見られなかった。その理由がようやくわかったのは、着任して半年ほど経ったころ。彼らには「スポーツの練習をした経験がなく、浅見さんが行う指導を見ても、どこをどう真似れば良いかがわからなかったのだった。



①浅見さんが週に1度訪問し、ボッチャの指導を行った学校では、現地の教員が自力で指導をするようになった。写真は、障害の程度が重い選手に使用が認められている滑り台のような補助具を使い、ボールを転がす練習をする脳性まひの子
②浅見さんは任期中、各校で対戦するボッチャの大会も開催した
③1カ月間の集中指導を行った小学校で、ボッチャに夢中に取り組む健常者の児童たち

障害者と健常者の対戦も実現

ネパールの大半の人が信仰するヒンドゥー教には、現在の状態「は前世を含む過去の『善行』と『悪行』の結果であるとする『カルマ』の考え、および『命あるもの』は何度も転生するとする『輪廻』の考えがあり、『障害』は『前世の悪行の報い』と見られている。そのため、同国では障害者への偏見が強く、障害者がいる家族がその存在を隠し通そうとするケースもある。そこで浅見さんは、障害者への偏見をなくすことを目的に、健常者にボッチャを普及させる活動にも取り組んだ。浅見さんは派遣前、日本のいくつものボッチャチームを訪ね、指導方法を教わった。そのなかで、重度の障害があるトップ選手とたびたび対戦をさせてもらう機会ももらったが、当初の予想に反してまったく歯が立たず、障害者の力をみくびっていた自分を恥じた。そうした経験があったことから、ネパールでも健常者と障害者が対戦する機会をつくれれば、後者が持つ力に驚き、前者が持つ偏見が吹き飛ぶのではないかと考えたのだった。

健常者への指導に力を入れるようになったのは、任期の半ばごろだ。継続して指導に訪れた

たのは、小学校1校と5カ所の孤児院。想定外だったのは、訪問先とした小学校の校長がボッチャ自体の魅力を高く評価し、児童にプレイさせることに極めて積極的になってくれたことだ。ボッチャにはチーム戦もあり、そこではチームのメンバー同士のコミュニケーションがきわめて重要な要素になる。そこにある教育的意義が、校長の着目したボッチャの魅力だった。校長は浅見さんが1カ月にわたって集中的に指導に通うことを快く受け入れ、さらに審判のやり方や障害について学んでもらう講習会などを開かせてくれただけでなく、浅見さんの帰国後、運動会にボッチャを取り入れるなど、継続的にボッチャとかわるようになったのだった。

浅見さんが指導した障害者と健常者が対戦する機会は、任期中に3度設けることができた。結果は、先に指導を始めていた障害者たちの勝利。ボッチャの国際大会では、健常者が「アシスタント」となって障害者と共にプレーをするカテゴリーもある。そうした場に、指導した健常者が参加してくれるようになれば、ネパールのボッチャはますます盛り上がるはず。そんな期待を持って、浅見さんは任期を終えることができた。

任地ひとロメロ 〈カトマンズ盆地〉



浅見さんが赴任したカトマンズ盆地は、中世に先住民のネワール族が独自の文化を華開かせた場所。当時つくられた建築などの一部はユネスコの世界文化遺産にも登録されている。写真はその1つ、ヒンドゥー教のニヤタボラ寺院。



伝統衣装のサリーで着飾り、結婚式に出席する新婦の関係者たち。浅見さんの任地で開かれるヒンドゥー教徒の結婚式の一般的な光景だ



たかぎいくえ
高木郁絵さん
(コミュニティ開発・2016年度1次隊)

PROFILE

1988年生まれ、長崎県出身。大東文化大学国際関係学部を卒業後、2016年6月に青年海外協力隊員としてネパールに赴任。18年6月に帰国。

活動概要

ネパール森林土壌保全省の地方出先機関であるバルバ郡土壌保全事務所(第5州バルバ郡タンセン)に配属され、女性グループによる蜜蝋キャンドルの製造・販売の立ち上げを支援。

捨てられていた「蜜蝋」を 材料とするキャンドルの 製造・販売をスタート

村落振興などへの支援を求められてネパールの丘陵地帯に派遣された高木さん。メインの活動となったのは、「蜜蝋キャンドル」を製造・販売する小規模ビジネスを、養蜂が盛んな地域で立ち上げることだった。

高木さんの配属先は、ネパール全体の森林行政を所管する同国森林土壌保全省のバルバ郡土壌保全事務所。地方出先機関の一つだ。当時同国では、村落振興と森林保全の両方を住民参加型で進めるプロジェクトが、バルバ郡を含む14郡で進められていた。かつて同国で実施されたJICAの技術協力プロジェクトをモデルにした「複製プロジェクト」で、「モチベーター」と呼ばれる現地巡回員を置き、彼らが住民グループへの密なサポートに当たることが特徴となっている。高木さんの配属先は、バルバ郡におけるプロジェクトの実施機関となっており、その支援をすることが、高木さんに求められていた役割だった。

同郡は農業を主産業とする地域。高木さんが農家の収入向上の手段として「蜜蝋キャンドル」に目を付けたのは、着任して半年ほど経ったころだ。郡内には養蜂が盛んな地域があった。情報収集のために初めてそこを訪れた際、ミツバチの巣から蜂蜜を取った後に残る絞りかすを農家が捨ててしまっている光景を目にした。蜂蜜の絞りかすには、巣の素材とするためにミツバチが分泌する蝋の「蜜蝋」が含まれている。蜜蝋でつくる「キャンドル」の存在を知っていた高木さんは、それまで捨

てられていた絞りかすを使って蜜蝋キャンドルを製造し、販売する小規模ビジネスの立ち上げを支援しようと着想。エベレストやユネスコの世界遺産に登録されている地域など、観光資源が豊かな同国では、多くの外国人観光客に土産物として高値で買ってもらえることが見込める。材料の絞りかすは従来捨てられていたものなので、安価で仕入れることができる。そうしたことから、蜜蝋キャンドルは利益率が高い商品となる可能性があり、配属先の同僚たちも高木さんのアイデアに賛同。養蜂が盛んな地域の住民を相手に、高木さんとモチベーターたちとで、事業立ち上げの支援を進めることになったのだ。

収入創出が実現

高木さんもモチベーターたちも蜜蝋キャンドルのつくり方を知らなかったことから、それを調べるのが最初のステップとなった。まずは外国人観光客向けの土産物店を回り、蜜蝋キャンドルを売っている店で仕入れ先の情報を入手。そうしていくつかのキャンドル工場を訪問したところ、材料や工程を教えることができた。その後、試作を重ねて、

いるが、まだその意識は人々の心に残っており、自分より低いカーストの人と結婚したり、食事をしたりすることは避けられている。高木さんも同様から、「自分よりカーストの低い人と一緒に食事をしたくない」と打ち明けられたことがある。カーストの違いにより、住民とモチベーターの関係が深まりきらないこともあり、高木さんの活動にも影響を及ぼした。

ヒマラヤ山脈の南麓に位置するネパールは、国土の8割を山岳地帯や丘陵地帯が占める。バルバ郡もそこに含まれ、標高は1400メートル程度。郡内の集落は山間に点在するため、高木さんたちが住民グループを回るの

は案ではなかった。蜜蝋キャンドルの活動対象となった養蜂が盛んな地域は、配属先がある町から山坂道をジープで4時間かけて辿り着く。日帰りは難しいため、蜜蝋キャンドルづくりの指導のために住民グループを訪ねる際

は、現地ですぐ2週間滞在する「出張」とせざるを得なかった。訪問先では通常、グループのメンバーの家に宿泊させてもらい、そうすることで彼女たちとの関係を深めた。ところが、低いカーストのモチベーターと共に訪ねるときには、「忙しいから」「部屋が散らかっているから」など理由を付けられて、宿泊の受け入れを断られてしまうのだった。そうした対応をされたモチベーターに、住民支援のモチベーションを保ち続けてもらうのは難しいことだった。

以上のように、ネパールにおける経済・社会の開発の複雑さや難しさを感じた高木さんだったが、任期を終えても心に残り続けているのは、朝早くから夜遅くまでよく働くネパールの農村女性たちの真面目さだ。帰国後も、たとえ小さな規模であれ、彼女たちへの支援をなんらかの形で続けていきたいというのが、高木さんの希望である。



1 活動対象の女性グループが製造した蜜蝋キャンドル
2 丸太をくり抜いてつくったミツバチの巣箱から巣を取り出す活動対象の女性たち
3 蜜蝋キャンドルづくりに取り組む活動対象の女性グループのメンバー
農村の女性グループを対象に、蜜蝋キャンドルづくりのトレーニングを実施する高木さん

より良い材料や工程を見極めていった。商品開発では次のような工夫をした。

【材料】 訪問したキャンドル工場では、石油からつくる安価な「パラフィンワックス」を蜜蝋に混ぜていたが、人体に悪影響を及ぼす恐れがあると言われていたことから、それは止め、「100パーセント蜜蝋製」として付加価値を高めることにした。

【容器】 訪問した工場ではキャンドル用の鋳型を使用していたが、任地の農家にはそれを入力する初期投資が難しいことから、任地で売られているヨーグルトのプラスチック容器を鋳型の代わりとすることにした。

商品開発を終えると、養蜂が盛んな地域の住民グループを対象に、つくり方を教えるトレーニングを実施。すると、9人の女性メンバーからなる一つのグループが蜜蝋の採集を始めて実施の意欲を示したことから、高木さんとモチベーターたちがたびたびそのグループのもとを訪れ、製造の現場に立ち会いながら、

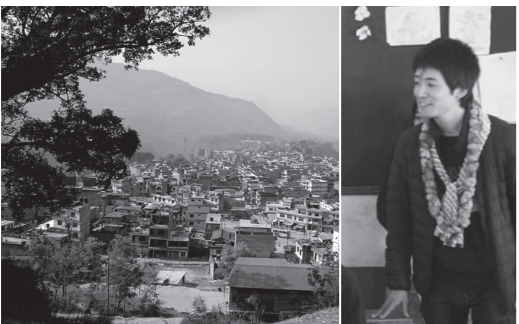
技術面のサポートを続けた。

そうしてつくられた商品を、手始めに首都で開かれた農業博覧会で販売。すると、1個500円ほどの値段で持ち込んだ30個が完売する。モチベーターの手当や交通費、材料の費用などを差し引いた約5000円を、グループのメンバーで分け合うことができた。このグループのうわさはその後、すぐに広まり、配属先には蜜蝋キャンドルづくりのトレーニングの依頼が殺到。また、高木さんの任期が終わる直前には、レストランや外国人用ゲストハウスで委託販売させてもらえるようになったのだ。

身分制度が活動に影響

ネパールの多くの人が信仰するヒンドゥー教には、「カースト制度」という身分制度がある。2011年に施行された法律により、現在はカースト(身分)による差別が禁止されて

ネパールと協力隊
〈日本語の指導〉



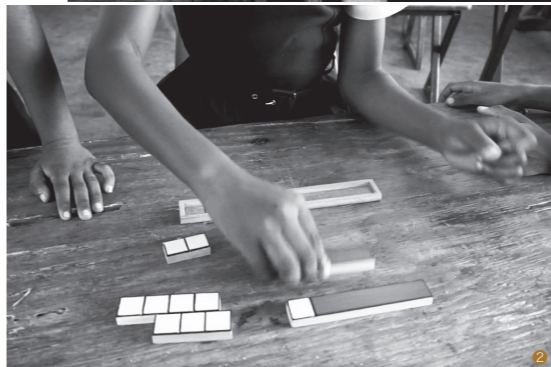
留学生や技能実習生などの立場で日本で暮らすネパール人は約9万人に上り、ネパールには日本語を教える学校が各地にある。長畑宏明さん(ネパール・コミュニティ開発・2017年度3次隊=右写真)が派遣されたのは、同国森林土壌保全省が第4州バルバット郡(左写真)に置く地方出先機関。標高約1300メートル程度の丘陵地帯にある農村部の郡だが、十数人の生徒を持つ私立の日本語学校が3つあった。教えているのは、国内で日本語を学んだネパール人。日本人と同じように日本語の会話や読み書きができる人たちだったが、彼らが不得意としていたのは「文法」だ。長畑さんは赴任して3カ月ほど経った時期に日本語学校の存在を聞き、訪問。教員たちから文法や発音を中心としたアドバイスを求められたことから、定期的に通い、授業のフォローにあたった。

* 蝋…通常の室温では固体の状態にあり、気体になるとよく燃焼する油脂状の物質。

特集

協力隊後の生き方 ～“起業”の道～

自力で現地の問題を見つけ、その解決策を考え、実践していく協力隊員。与えられた仕事をこなすのではなく、自分で自分の仕事をつくり出す。そうした経験によって、帰国後は「起業」に挑戦したいと考える隊員も少なくないだろう。本特集では、それを実践している協力隊経験者の事例をピックアップしてみた。



①出張型学習塾で算数の個別指導をする古田さん
②古田さんが算数教室に取り入れている木製のブロック教材。現地の木工所に製作を依頼した
③ロボットのおもちゃを使ったプログラミング教室の様子

CASE 1 教育

出張型学習塾

古田優太郎さん
(ジャマイカ・数学教育・2016年度1次隊)

派遣国に戻って算数の塾を開き より良い指導方法の普及を目指す

協力隊時代、ブロックを使って「集合数」の概念を身に付けさせる算数授業に取り組んだ古田さん。手応えが大きかったことから、任期を終えた後に再度ジャマイカに渡り、「塾」という形でその指導方法の普及を図ることにした。

出張型学習塾

本拠地：ジャマイカ
開業：2018年
事業：算数教育、
プログラミング教育

——協力隊時代の派遣国であるジャマイカで経営されている学習塾について、概要をお教えください。
算数とプログラミングを教える、小中学生を対象とした塾です。さまざまな地域の子どもに利用してもらえよう、自前の教室は持たず、放課後に学校の教室を有料で借りて授業を行う「出張型」にしています。ボランティア活動として算数教育を行う活動からスタートさせた

四則計算の力があって初めて習得できる能力なので、時期尚早だと思ったのですが、私は省全体の方針を覆せるような立場ではなかったのです。
——教育省を退職した後に、先ほどお話しに出たプログラミング教育を行う会社に出たという点についてどう思いますか。
そのとおりです。教育省に勤務しているときから、塾の経営を本格化させるためには、それに必要なノウハウをしっかりと勉強しなければと考えていました。そんななかで、転職先の企業が塾のような形でプログラミング教育を行っていることを耳にします。そうして、まずはプログラミング教育の現場を見学させていただき、その後、社長から「うちで働かないか」とお声がけがありました。ジャマイカでは、水泳や空手、卓球など、スポーツを中心とする「習い事」が盛んです。現地の習い事で一般にどのように生徒を募集したり、月謝を設定したりしているの

——塾は今後、どのような形で本格化させる計画でしょうか。
私だけで授業を行うのではなく、現地の若い人を雇用し、私とペアになって授業を行うようにしたいと考えています。そうすることで、私が行っている算数教育の方法が、現地により広がります。やるはずだからです。教育に強い思いを持ち、勉強をしっかり続けてきたのに、コロナ禍で職を失ってしまった知人が何人かいて、まずはそうした人たちに声をかけています。人を雇用するためには、収入源となるプログラミング教室の受講者を増やすことが必要であり、多くの受講者を受け入れるためには、教室で使うパソコンなどを拡充しなければなりません。そのための資金をクラウドファンディングで募ったところ、トータルで250万円ほどの寄付をいただくことができました。

——今後の抱負をお聞かせください。
ブロックを使って集合数の概念を身に付けさせる方法など、算数教室で実践している指導方法や、そこで使っている教材について改善を進めていき、一定のまとまったメソッドを確立したいと考えています。そのうえで、確立したメソッドを学校教育に導入してもらえれば、ジャマイカの教育省に提案する。もしその導入が叶ったら、私の塾の使命もひと区切りとなり、あらためて次の生き方を探すことになると思います。

れ数人ずつという小さな規模だったのですが、今年に入って勤務先を退職し、塾の経営を本格化させるための準備に専念するようにになりました。コロナ禍で現在、塾は一時休校していますが、9月には再開する予定です。
——開業のきっかけは？
協力隊時代、ジャマイカ教育省の地方出先機関に配属され、小学校低学年の算数教育の改善支援に取り組みました。力を入れたのは、「集合数」の概念を身に付けさせる授業を実践し、その意義を発信することです。同国の算数教育のカリキュラムは、子どもの理解のステップを踏まえていない構成となっており、小学校低学年では「1つ目」「2つ目」という「順序数」の概念だけを教え、「1個」「2個」と数を「量」で捉える「集合数」の概念を教えないまま、四則計算の指導に入ることになっていきます。そうしたカリキュラムでは、四則計算の力が付きません。現地では、四則計算能力向上のために繰り返しドリルを解かせることなどが行われていましたが、効果は上がっていませんでした。そうしたなか、私がブロックを使って集合数の概念を身に付けさせる授業を試みたところ、四則計算のテストの平均点が2倍に伸びました。しかし、協力隊時代にその指導方法を各校に普及させるまでには至りませんでした。その経験から、任期を終えた後も同種の指導方法を現地で実践し、普及させたいと考え、運営することにしたのが現在の学習塾であり、算数教室ではやはりブロックを使って集合数の概念を身に付けさせる指導をメインにしています。協力隊の任期を終えてまもない時期にジャマイカ教

育省に就職し、その仕事のかたわらで塾の活動をスタートさせました。
——教育省に就職したのはどのような理由だったのでしょうか。
塾を立ち上げることはすでに協力隊の任期中に考えていたのですが、どのような運営体制が良いのかが見えなかったため、まずは現地で定職に就き、そちらで生活費を稼ぎながら、ボランティアで塾の活動をスタートさせることにしました。教育省で私が就いたのは、外国人を対象に募っていた「算数コーチ」というポストで、その求人が出ていたことは、協力隊時代に付き合っていた教育省の職員から教えていただきました。
前述したような同国の算数教育のカリキュラムの問題は、教育省の内部に入れば改善に向けた働きかけができるだろうと考えていたのですが、実際は難しかったです。当時、同省では「問題解決の思考能力」を養うような指導を算数教育に導入する計画を進めていました。それは、

先頭の小学校で算数授業を行う協力隊時代の古田さん

先頭の小学校で算数授業を行う協力隊時代の古田さん

特集

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

れ数人ずつという小さな規模だったのですが、今年に入って勤務先を退職し、塾の経営を本格化させるための準備に専念するようにになりました。コロナ禍で現在、塾は一時休校していますが、9月には再開する予定です。
——開業のきっかけは？
協力隊時代、ジャマイカ教育省の地方出先機関に配属され、小学校低学年の算数教育の改善支援に取り組みました。力を入れたのは、「集合数」の概念を身に付けさせる授業を実践し、その意義を発信することです。同国の算数教育のカリキュラムは、子どもの理解のステップを踏まえていない構成となっており、小学校低学年では「1つ目」「2つ目」という「順序数」の概念だけを教え、「1個」「2個」と数を「量」で捉える「集合数」の概念を教えないまま、四則計算の指導に入ることになっていきます。そうしたカリキュラムでは、四則計算の力が付きません。現地では、四則計算能力向上のために繰り返しドリルを解かせることなどが行われていましたが、効果は上がっていませんでした。そうしたなか、私がブロックを使って集合数の概念を身に付けさせる授業を試みたところ、四則計算のテストの平均点が2倍に伸びました。しかし、協力隊時代にその指導方法を各校に普及させるまでには至りませんでした。その経験から、任期を終えた後も同種の指導方法を現地で実践し、普及させたいと考え、運営することにしたのが現在の学習塾であり、算数教室ではやはりブロックを使って集合数の概念を身に付けさせる指導をメインにしています。協力隊の任期を終えてまもない時期にジャマイカ教



Furuta Yutaro

PROFILE

1991年生まれ、神奈川県出身。大学卒業後、公立中学校に数学科の非常勤講師として勤務。2016年6月、青年海外協力隊員としてジャマイカに赴任。ブロックを使った算数授業の実践などに取り組む。18年6月の任期終了後、ジャマイカの教育省に就職。その勤務のかたわらで、出張型の学習塾をスタート。その後、教育省から現地の企業への転職を経て、塾経営の本格化に着手。



先頭の小学校で算数授業を行う協力隊時代の古田さん

先頭の小学校で算数授業を行う協力隊時代の古田さん

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

拡大造林政策以降、苗木の生産者は減る一方でした。そうしたなか、長野県で生産を続けてきた1人が、私の師匠です。私は協力隊に参加する前、林業のコンサルティング会社で働いており、その時期



Arai Rikako

PROFILE
1986年生まれ、長野県出身。林業のコンサルティングを行う長野県一般社団法人に勤務した後、2014年6月に青年海外協力隊員としてベネズエラに赴任。苗木づくりやコンポストづくりの指導などに取り組む。16年6月に帰国し、同年7月に「荒井種苗」を開業。18年度の全国山林苗木品評会(全国山林種苗協同組合連合会主催)にて、林野庁長官賞を受賞。



協力隊時代の荒井さんの指導対象者たちが苗木生産に取り組む様子

「開業のきっかけは？」
苗木生産の師匠から、「帰国後は苗木づくりをやらなにか」と声をかけていただいたのがきっかけです。日本政府は戦後、復興のための木材需要に対応するため「拡大造林政策」を実施しました。広葉樹の天然林を、より速く太い木に育つ針葉樹に植え替える政策です。その時期に植えた苗木が近年、木材として使えるまでに育ち、伐採して新たな苗木を植えるタイミングになっています。しかし、拡大造林政策以降、苗木の生産者は減る一方でした。そうしたなか、長野県で生産を続けてきた1人が、私の師匠です。私は協力隊に参加する前、林業のコンサルティング会社で働いており、その時期

「法人格を取得されていませんが、事業はお1人で回しているのでしょうか。」
カラマツの苗木生産で集中的に労力を投入しなければならぬのは、苗畑で発芽させた苗を育苗容器に植え替える作業で、その期間は年に1週間ほどです。その時期は知人にアルバイトを頼むなどしてありますが、それ以外は基本的に私一人で作業をこなしています。長野県内の苗木生産者には会社組織にしている方もいますが、いずれも「庭木の販売」や「樹木の伐採」など、ほかの仕事も掛け持ちしています。私は会社勤めをする夫との共働きで、苗木生産に限定して働くことを選んでいるため、事業の規模として個人事業主のまま進めても差し障りがないため、法人格を取得していません。夫も私と同じ時期に協力隊員としてベネズエラに派遣されていた男性で、現在は2人の子どもを保育園に預けながら仕事を続けています。

「開業のきっかけは？」
苗木生産の師匠から、「帰国後は苗木づくりをやらなにか」と声をかけていただいたのがきっかけです。日本政府は戦後、復興のための木材需要に対応するため「拡大造林政策」を実施しました。広葉樹の天然林を、より速く太い木に育つ針葉樹に植え替える政策です。その時期に植えた苗木が近年、木材として使えるまでに育ち、伐採して新たな苗木を植えるタイミングになっています。しかし、拡大造林政策以降、苗木の生産者は減る一方でした。そうしたなか、長野県で生産を続けてきた1人が、私の師匠です。私は協力隊に参加する前、林業のコンサルティング会社で働いており、その時期

「最後に、協力隊の任期を終えた後に「林業」や「第一次産業」などで起業することを視野に入れている後輩隊員に向けて、メッセージをお願いします。」
日本の林業は、苗木の生産でも木の伐採でも、人材不足が深刻です。しかし、特に木の伐採は危険度も高く、林業に就いてもほどなく辞めてしまう人も多い。レーザーによる測量などの技術で手間の軽減は進んでいます。まだまだ人間が手間をかけて木に向き合うことは必要です。一方、「人間と自然のせめぎ合い」という状況に意識を向けている方にとって、林業は非常に面白い仕事だと思っています。そうした方にはぜひ、帰国後の進路の一つとして林業を検討していただければと思います。



①荒井種苗の苗木生産所。張り巡らせている鉄のパイプは、井戸水を汲み上げて散水する設備
②出荷できる状態まで育ったカラマツのコンテナ苗
③育苗に使うカラマツの種子は、種子が飛び出す前の松かさを受取り、写真のような状態で乾燥させてから取り出す

CASE 2 荒井種苗 林業

荒井里佳子さん
(ベネズエラ・林業・森林保全・2014年度1次隊)

「人間と自然のせめぎ合い」という視座に立って、林業をなりわいに

派遣前は林業コンサルティングに、協力隊時代は苗木生産の技術指導に携わった荒井さん。それらの経験をベースに帰国後の道に選んだのは、苗木の生産・販売をする事業の立ち上げだ。

荒井種苗
本拠地：長野県上田市
開業：2016年
事業：苗木(カラマツ・スギ)の生産・販売

「荒井種苗」の事業内容についてお教えください。
主にカラマツの「コンテナ苗」を生産、販売しています。コンテナ苗というのは、根が固まって成長できなくなる「根巻き」を防ぐような細工をした育苗容器で育てる苗木で、日本では10年ほど前に導入が始まった技術です。苗畑で育てる従来の「裸苗」と比べ、養土が根にまとわり付いた状態で出荷できるため、「山に

植える際の手間が少ない」「山に植えた後に根付く率が高い」といったメリットがあります。他方、散水や追肥などの手間がよりかかるため、販売価格は裸苗の倍ほどになってしまっているのですが、普及を進めるために政府が支援の制度を設けており、商売として成り立つ状況になっています。カラマツの苗木は出荷までに2年ほどかかり、荒井種苗では常時5万本ほどの苗木を育て、年に2万本ほど出荷

「主な販路は？」
長野県では、林業用苗木の生産者でつくる組合が、国や民間の山林保有者が実施する苗木調達の入札に応じ、落札できると、組合員たちに出荷を依頼するという仕組みになっています。造林は、その土地の自然環境に合った種類の木を植える「適地適木」が重要で、苗木の買い手はそうした条件を設定して売り手を募り

「主な販路は？」
長野県では、林業用苗木の生産者でつくる組合が、国や民間の山林保有者が実施する苗木調達の入札に応じ、落札できると、組合員たちに出荷を依頼するという仕組みになっています。造林は、その土地の自然環境に合った種類の木を植える「適地適木」が重要で、苗木の買い手はそうした条件を設定して売り手を募り

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

「一点物」となっています。セネガルのプリント布を使った服や雑貨の製造、販売が事業の柱です。商品の開発は私が行い、製造はセネガルにいる現地のテーラーたちに委託しています。販路は、イベントや朝市での出店、フェアトレード専門店や雑貨店での委託販売などで、私が住む岡山県や近県が中心となっています。活動開始は帰国の約半年後

Taga Tomoko

PROFILE
1989年生まれ、岡山県出身。大学卒業後、マンチェスター大学大学院修士課程で「貧困と開発」を学ぶ。2014年9月に青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。ゴミ問題の啓発活動の一環として、服に使う布の端切れをリユースしてバッグやポーチを製作・販売する活動の支援に取り組む。16年9月に帰国した後、岡山県内の観光案内所で働くかわら、ジャムタンを開業。

任地の住民たちのもとにお別れのあいさつに訪れた協力隊時代の田賀さん

か、縫い目が歪んでいたりと、日本で買ってもらえる製品の質に達していないものも多く、「アフリカっぽい。もう少し真っ直ぐ縫えるかもしれないわね」などと言われてしまうこともあって、価格を低く設定してどうにか買ってもらったという状態でした。しかし、日本で買ってもらうために必要な品質についてAさんに繰り返し伝え続けたところ、テーラーたちの技術も向上し、高値で販売することができるようになりました。最近では、日本で作られているアフリカの布の服などを、彼ら自身でインターネットを使って調べ、さらなる品質向上への意欲を高めているようです。

* 就労継続支援A型…障害や難病のある人が、雇用契約を結んで働けるよう支援する制度。

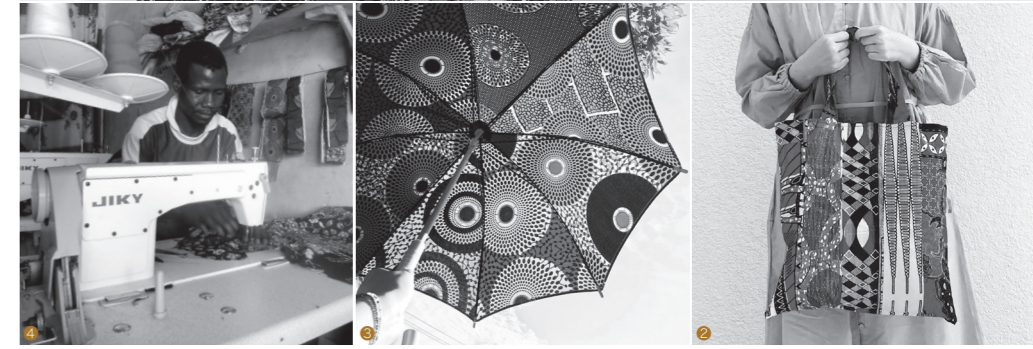
「一点物」となっています。セネガルのプリント布を使った服や雑貨の製造、販売が事業の柱です。商品の開発は私が行い、製造はセネガルにいる現地のテーラーたちに委託しています。販路は、イベントや朝市での出店、フェアトレード専門店や雑貨店での委託販売などで、私が住む岡山県や近県が中心となっています。活動開始は帰国の約半年後

で、当時から現在まで、観光案内所勤務との「二足のわらじ」を続けています。最初は、セネガルの布が日本人に受け入れられない確信がなかったため、うまく行かなければきっぱり止めようと考えていたのですが、思った以上に買っていただけのことだったので、活動開始の約1年後には半年にわたる起業家向けの講座を受講し、ビジネスの基礎を学びました。

商品の特徴をお教えてください。セネガルでは、好みの布を買ってテーラーに持ち込み、服に仕立ててもらうのが一般的です。ジャムタンの商品の素材として使っているのはそうした布で、色や柄の異なる多様な布が手に入ります。そこで、ジャムタンの服はそれぞれ違う布を使い、すべてを「一点物」の商品とすることにこだわっています。愛着を持って、長く使っていたいからです。最近

は、在庫の布からお客様自身に好みのものを選んでいただき、それを使った服を仕立ててお届けする「セミオーダーメイド」も始めました。デザインに関しては、どんなに布の色や柄が出ないよう、フリルなどの装飾を付けず、形を極力シンプルにするなどの工夫をしています。端切れのバッチワークでつくるバッグやポーチなどの雑貨も、どの布を組み合わせても、縫い目が歪んでいたりと、日本で買ってもらえる製品の質に達していないものも多く、「アフリカっぽい。もう少し真っ直ぐ縫えるかもしれないわね」などと言われてしまうこともあって、価格を低く設定してどうにか買ってもらったという状態でした。しかし、日本で買ってもらうために必要な品質についてAさんに繰り返し伝え続けたところ、テーラーたちの技術も向上し、高値で販売することができるようになりました。最近では、日本で作られているアフリカの布の服などを、彼ら自身でインターネットを使って調べ、さらなる品質向上への意欲を高めているようです。

* 就労継続支援A型…障害や難病のある人が、雇用契約を結んで働けるよう支援する制度。



①今年初頭に岡山県内の雑貨店でやらせてもらった期間限定の委託販売
②セネガルのテーラーに布の選択を任せ、つくってもらったバッチワークのバッグ
③日本の就労継続支援A型の事業所に製造を委託しているセネガルの布の日傘
④テーラーのリーダーを務めてもらっているAさん

CASE3 アパレル業 jam tun

田賀朋子さん
(セネガル・コミュニティ開発・2014年度2次隊)

派遣国のテーラーがつくる服や雑貨を日本で販売

協力隊時代、現地の服に使われる布の端切れをリユースして雑貨をつくる活動に取り組んだ田賀さん。帰国後は、その活動でつながった現地のテーラーをパートナーに、現地の布を使った製品を製造・販売する事業を立ち上げた。

jam tun (ジャムタン)
おだんやかげちよう
本拠地：岡山県小田郡矢掛町
開業：2017年
事業：セネガルのプリント布を使った服や雑貨の製造・販売

Instagram Facebook

協力隊後の生き方

～“起業”の道～

「スパイス計画」の事業内容についてお教えください。

店舗は構えず、言わば「出張シェフ」の形でスリランカ料理をご提供することが、事業の中心です。スリランカ料理は味や素材がきわめて多様なカレーが特色ですので、ワンプレートにライスと数種のカレーを盛り付けたものを主力メニューとしていきます。現在まで法人格は取らず、個人事業主として事業を進めています。

それはするつもりだったのですが、「文化」と言っても広範ですから、なかなかプランをまとめることができませんでした。そうしたなか、派遣前に食品メーカーに勤めていたこともあり、任期の後半は農村部で料理教室を開くことがメインの活動になりました。調味料を使わない現地の料理は味が単調だったため、現地ですり入る調味料を使って味の幅を広げる方法を伝えようと考えたのです。その活動のなかで実感したのは、かつて旅先で出会った、味や素材に多様性を持つアジアの国々の料理の魅力です。そして帰国する時期には、切り口を「アジア」と「料理」に限定したうえで、各国の独自の文化を調査、記録し、学んだ料理を日本に提供するような仕事にチャレンジしたいと考えようになりました。

最初のターゲットを「スリランカ料理」に決めたのは、帰国して一年半ほど経った時期です。私自身が南アジアの料理のファンだったこと、当時、日本人にはあまり馴染みがない料理だったことなどが決断の理由です。その後、まずは料理の基礎を身につけようとフランス料理店で修行をさせていただいたうえで、スリランカに渡り、9カ月間をかけて現地の料理を学びました。開業したのは、スリランカから帰国してすぐのことです。

——スリランカではどのようにして現地の料理を学んだのでしょうか。

協力隊の伝手を頼りに現地のネットワークを広げ、NGOが運営する障害者施設やレストランなどでお手伝いをさせていただきながら、そのスタッフなどからひとつひとつ現地の料理を教わっていききました。単にレシピをメモや写真で記



①福岡県直方市のコミュニティスペースでスリランカカレーを提供する内藤さん
②同じコミュニティスペースの厨房で調理をする内藤さん
③内藤さんが依頼に応じて時折開いている、スリランカ料理教室の様子
④「スパイス計画」の主力メニューであるワンプレートのカレー。5種のカレーを載せるのを基本としている

スパイス計画

CASE 4 飲食業

内藤直樹さん
(パプアニューギニア・コミュニティ開発・2013年度4次隊)

現地の人に学んだ「料理」を提供し、
現地の人々に思いを馳せてもらう

協力隊員として「料理教室」の開催に力を入れた内藤さん。帰国後の仕事に選んだのは、各国の伝統的な料理を学び、記録し、それを日本で再現して伝えることだ。

スパイス計画

本拠地：福岡県直方市
開業：2019年
事業：スリランカ料理の提供、スリランカ料理教室の開催

Instagram Twitter Facebook



「スパイス計画」の事業内容についてお教えください。

店舗は構えず、言わば「出張シェフ」の形でスリランカ料理をご提供することが、事業の中心です。スリランカ料理は味や素材がきわめて多様なカレーが特色ですので、ワンプレートにライスと数種のカレーを盛り付けたものを主力メニューとしていきます。現在まで法人格は取らず、個人事業主として事業を進めています。

当初は、友人が住む福岡県や隣の佐賀県などで、単発の依頼に応じて一般の方の家やゲストハウスなどに赴いて料理を提供していたのですが、昨年の10月からは、地域づくりに取り組み福岡県直方市の団体が同市に開設したコミュニティスペースで週2回、定期的に営業させていただくようになりました。さらに、コロナ禍で営業を停止していた間、福岡県内のスリランカ料理店やスーパーなどが

からお声がけいただいたことから、バナナの葉でカレーを包んだスリランカスタイルの弁当を店舗で販売させていただくようにもなりました。現在は弁当の製造で多忙になっているのですが、これまでのところ、個人で事業を回しています。

——開業のきっかけは？

出発点は、協力隊に参加する前にバックパッカーとしてアジアや大洋州の国々を旅した際に、「首都はどこも同じよう

録するだけでなく、「この味ならOKだ」と現地の方々に言っていただけになるまで試作を重ね、腕を磨きました。海外の方と料理を通じたコミュニケーションをするというのは、まさに協力隊時代に取り組み、慣れてきたことですので、スリランカでの料理修行は協力隊活動の延長のような感覚でした。

——スリランカ料理の魅力はどこにあると感じていらっしゃいますか。

アーユルヴェーダというインドやスリランカの伝統医学では、「甘味」「酸味」「塩味」「苦味」「辛味」「渋味」という6つの味を毎回の食事に取り入れることが体に良いとされており、現地の方々も実際にそれを意識して料理をつくっていらっしゃいます。おもしろいと思うのは、人間が舌で感じ取ることができる「基本五味」には含まれない「渋味」が含まれている点です。日本にも「アukum味のうち」という言い伝えがありますが、現在はやはり、渋味のようなものは排除される傾

向にあるのではないのでしょうか。その点、今でも渋味を意識的に取り入れているスリランカの料理は、たしかに味が複雑で、立体的だと感じますし、「ネガティブに見える要素が入ることで、全体の魅力が増す」という点では、「人生」に似て、奥深い料理のあり方だとも感じています。

——食材や調味料は日本で仕入れているのでしょうか。

カレーは15種類ほどのスパイスを使っていますが、大半は日本で手に入ります。お米はスリランカ産も手に入りますが、癖がなく、スパイスの風味が生きるパキスタン産を使っています。具に使う野菜に関しては、現地のものと同じにすることにこだわらず、福岡県の農家から仕入れた季節の野菜を使うようにしています。と言うのも、スリランカは常夏の国であるため、現地ではナスやインゲンなどの夏野菜に偏っているからです。

——主な客層は？

やはり「カレーが大好き」という方が

多いですね。お客様には、料理を通して現地の方々の暮らしに思いを馳せていただきたいと考えており、努めてお客様と話をし、スリランカで料理を教えてくださいました。スリランカの方々の生活の様子を伝えるようにしています。そうしたことから、カレー好きのお客様たちとのオンライン飲み会へと発展することもあります。

——自前の店舗を構えない意図は？

起業すれば舵取りの責任をすべて自分で負います。そのため、常に先々の見通しを考えることが不可欠ですが、同時に、先々を考えるあまり、「まだちょっと準備が不十分だから」と言ってしまうのをためらうのも禁物ではないかと思っています。実践することで予期せぬ壁にぶつかることがいくらかもあるはずだからです。そうした考えから、スリランカから帰国した後、店の物件探しに時間をかけるのではなく、まずは「出張シェフ」として実践をスタートさせてしまうことにしました。これまでの経験で生計を立て方や自分の将来像がある程度見えてきたため、現在は、より「表現」できる場をつくりたいという思いから、一軒家の物件を国内各地で探しているところです。

——今後の抱負をお聞かせください。

南アジアの南端にあるスリランカの料理からスタートさせたので、今後は南アジアを北上する形で、パキスタンやバングラデシュなどの料理へと事業の幅を広げていきたいと考えています。チャンスを見つけたら、新たな地に赴いては、現地の人に料理を学び、それを日本で提供する。さらに、記録した各国の伝統料理に関する情報を本などにまとめ、発信できたらとも考えています。



Naito Naoki

PROFILE

1988年生まれ、兵庫県出身。大学を卒業後、食品メーカーに営業職で勤務。2014年3月、青年海外協力隊員としてパプアニューギニアに赴任。健康増進や食料の多様化を目的とした、農村部の住民への料理指導などに取り組む。16年3月に帰国した後、フランス料理レストラン勤務、スリランカでの現地料理の修行などを経て、19年、スリランカ料理の提供やスリランカ料理教室の開催を行う事業を開始。



現地で手に入る調味料を活用して料理の幅を広げる方法を伝える教室を開く、協力隊時代の内藤さん

活動内容

2018年度の授業開始の約1カ月後に着任。任期を通して、単独で理科と数学の授業を行うことが活動のメインでした。担当した学年と科目は以下のとおりで、いずれも週に3、4コマ。最大で週に20コマを担当しました。

【2018年度】

- 9年生の数学（必修科目）＝1クラス
- 10年生の基礎理科（物理・化学・生物の基礎を教える科目、選択科目）＝受講生徒は約30人
- 11年生の物理（選択科目）＝受講生徒は7、8人

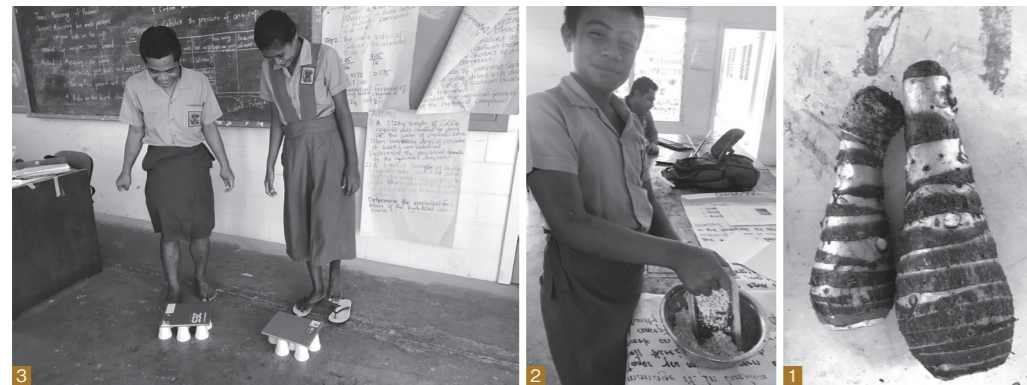
【2019年度】

- 10年生の数学（必修科目）＝1クラス
- 11年生の数学（必修科目）＝1クラス
- 11年生の物理（選択科目）＝受講生徒は7、8人

理科の授業では当初、「なぜこんなに理解してもらえないのか」と悩みました。解決の糸口が見えたのは、ホームステイ先での体験です。ホストファミリーは食器を洗う際、食器洗い用の洗剤は高価だからと、人体に害のある洗濯用の

洗剤を使っていました。そこで私は、学校で教える化学の知識が「生活」に結び付けて捉えられていないと感じたため、授業では科学的知識を「生活」と結びつけて説明することにしました。すると、教えた知識の定着率が上がるのが小テストの結果などからわかりました。

例えば、「将来、黒い車を買うか、白い車を買うか」と尋ねた後、凸レンズで太陽光を屈折させて白と黒の紙に焦点を当て、黒い紙なら焼けることを確かめる「熱の吸収率」を学ぶ実験をし、「黒い車は熱くなること」を確認させました。そのように、実生活に結びつけた理科の授業を展開することで、生徒の関心が高まり、「もっと理科の実験をしたい」という自発性が生まれていきました。全国の学校の代表者が学習活動のアイデアを競うコンクールが開かれた際、理科部門の発表の指導を担当したのですが、現地の主食がサトイモ科の植物のタロイモであることに着目し、タロイモでデンプン糊をつくる実験を採用。すると、生活と結びつけた学習である点が評価され、優勝することができました。



1 現地の主食のタロイモ
2 学習活動のアイデアを競う全国コンクールで、デンプン糊をつくるためにタロイモをすり下ろす理科部門の代表生徒
3 城間さんが授業で取り入れた、並べた紙コップの上の板に乗る「圧力」の実験に取り組む生徒たち

活動環境

配属先の 基礎情報	名称	アアナ・ナンバーワン中高等学校
	所在地	ウポル島ファレオロ
	事業内容	公立の中高等学校（5年制＝9～13年生）
	生徒数	約300人（1クラスは最大30人／1学年は1～3クラス）
	教員数	約30人（活動を共にする理科教員は3人、数学教員は5人）
	学期数	4学期（年度開始は1月）
	教育言語	英語（実際はサモア語が使われることも多い）
	時間割	60分/コマ、8コマ/日
その他	教科書は教員だけが持ち、その板書を生徒が写す。11年生より上の学年では、そもそも国定の教科書がない科目もあり、図書室に置いてあるニュージーランドやオーストラリアの教科書を教員たちが適宜利用。	



1 配属先の理科室。城間さんはその整備にも取り組んだ
2 配属先で毎朝8時半から行われていた朝礼

未来の 協力隊員へ

任期の前半に苦労したのは「クラスコントロール」です。サモアの生徒は、筆記用具の貸し借りのための立ち歩きが後を絶たず、授業に集中できません。また、テストでのカンニングも常態化していました。現地の教員は体罰などで威圧的にクラスコントロールをするのが一般的で、それに慣れている生徒たちは、体罰をしない私の授業では好き放題になってしまうのです。威圧的な授業で生徒たちは「勉強はやらされるもの」と感じてしまっており、私はそれに替わるクラスコントロールの方法が見つけれず、悩み続けました。任期の半ばになり、自分が考えていることをもっと明確に発信しなければいけないと思い立ってから、状況は好転。体罰に慣れ、私がそれをしない意図がわからなかった生徒に対して、「なぜ体罰をしないのか」「生活を豊かにする」という勉学の目的を伝え続けました。すると、生徒たちも私の言葉を1つずつ理解し、私が大切にしていることを大切にしてくれるようになりました。その結果、立ち歩きやカンニングが減り、私が描いていた授業に近づくことができました。異文化の人々とのコミュニケーションは、「私とはどんな人物なのか、何を考えているのか」を明確に発信し、「国や文化に関係なく、互いに理解し合うこと」が重要——これが、協力隊経験で私が得た最大の学びです。

私の引継書 ～未来の協力隊員へ～

協力隊経験者たちに、「未来の協力隊員たち」に向けた活動報告を行っていただきます。

しろまあずさ
話＝城間梓沙さん
(サモア・理科教育・2017年度3次隊)



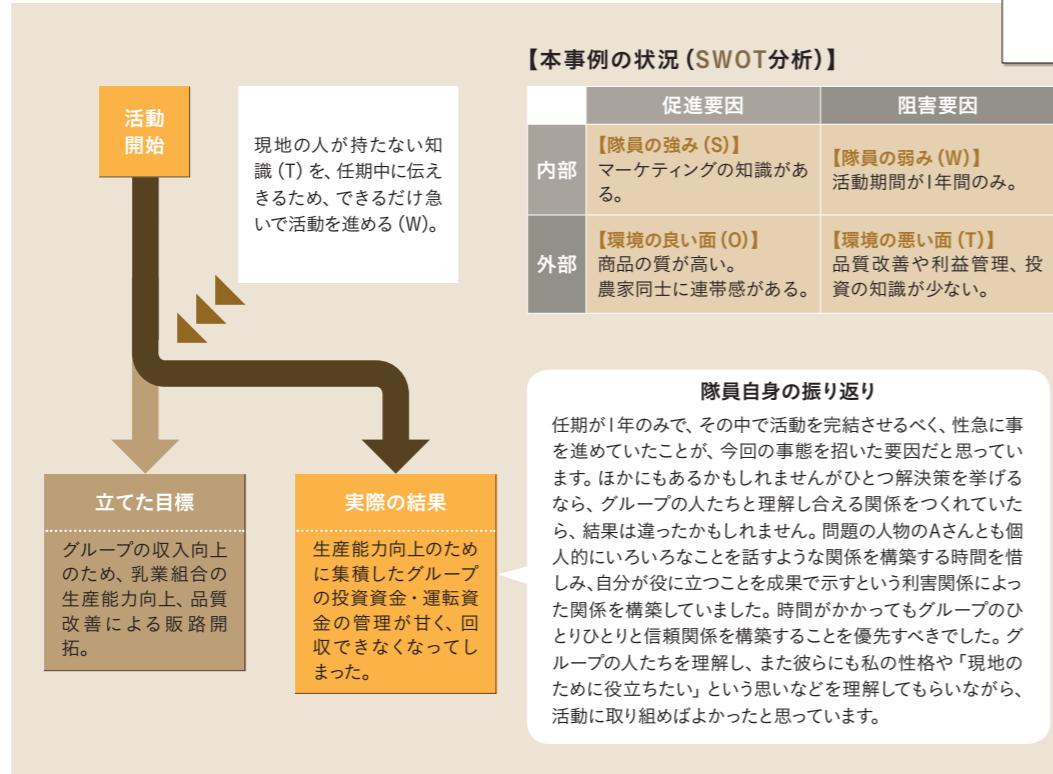
PROFILE

1989年生まれ、沖縄県出身。大学の理学部を卒業後、中高一貫校に理科教員として勤務。2018年1月、青年海外協力隊員としてサモアに赴任。20年1月に帰国。

“失敗”から 学ぶ #183



事例整理



他隊員の分析

信頼関係づくりと成果のバランス

実績を出すことで信頼を得ることも大切だと感じています。活動期間内に、信頼関係づくりと実績の追求のバランスが取れた活動ができたよかったです。実際は難しいことだと思います。お金の管理を誰がするのかなどグループ内で話し合う機会を持ち、大切なことを「見える化」し、グループで交流しながら活動を進めるとまた違った結果であったかもしれません。私は今回の事例とは逆に信頼関係づくりに時間を割き、成果をもっと追及して活動できていればと悔いがあります。配属先は次の隊員へと継続要請を出し、後任に託しました。

文＝協力隊経験者

- アジア・コミュニティ開発・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

活動1年目は郡のコミュニティ開発部に配属となり、一村一品の販路開拓を目指す。2年目に県のコミュニティ開発局に配属先が変更になり県全体の一村一品や観光のプロモーションに従事した。

成果も大事だけれど、交流は活動の基礎

国を問わず、金銭トラブルは避けることが難しいものです。ただし、お金への価値観というのは、その国の経済情勢や物価だけでなく、個人の収入、社会的地位、家族構成などによっても大きく異なります。現地の人々との交流を通して、派遣国における一般的な金銭的価値観や個人への理解を深めていけば、適切な資金管理ができたのかもしれませんが。私の場合、現地の人々との日常の何気ない交流から配属先以外の人脈が形成され、後の活動につながっていきました。信頼関係の構築が成果への近道になったと考えています。

文＝協力隊経験者

- アジア・マーケティング・2014年度派遣
- 取り組んだ活動

省庁の下部組織において、配属先が実施する職業訓練の改善支援、新聞エコバッグの普及及び商品化支援、災害発生後に学校への救急セット配布支援などを実施した。

任期が短い中でも成果を出そうと焦り、 人との交流を疎かにしてしまった

文＝塩田真也さん(ケニア・マーケティング・2017年度3次隊)

一村一品運動終了後のフォローアップを行うため、マーケティングの職種でケニアに派遣された。民間連携ボランティア制度による派遣で、私の場合は活動期間は1年間。その中で活動を完結させるべく、効率よく活動を進めようとした。

最初に、かつて一村一品運動に参加していたグループの情報収集を実施。どのグループともほぼ連絡がつかないなか、牛乳やヨーグルトを生産する乳業組合と接触でき、現状を尋ねた。すると、製品の質は良いものの、梱包材の耐久に問題があつて地元でしか販売できず、グループの収入拡大につながらないという課題があると知り、支援を行うことにした。

このグループは、毎日各農家から生乳を生産拠点に集め、乳製品を生産し、地元の小売店に供給している。生産と売上は生産拠点専任の担当者が管理。また、売上から得られた利益はグループの中心農家のAさんが管理し、各農家の生産量に応じて月1回、支払いを行っていた。

活動初期は、担当者やAさんへの聞き込みをし、課題となっていた梱包材の品質改善方法を伝えた。活動期間の短い私は、個人的な付き合いによる信頼関係の

構築には時間を割かず、実績を出すことで信頼を得るというビジネスライクな関係で活動に取り組むことにした。

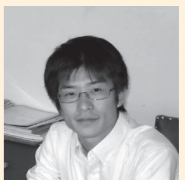
活動中期は、品質改善によって流通可能になった新たなエリアへの営業活動を支援。少しずつ販路を広げ、任期終了3カ月前に生産能力拡大のために新規農家の取り込み、また生産設備拡充のために経営指導を開始。投資用の資金集積も始めることができた。運転資金・投資資金の管理はAさんに任せていた。

しかし、Aさんがグループの資金を持って国外へ逃走。グループは運転資金が不足し、代金未払いによる農家の離散と、生産力減少による供給不足に陥り、販路を喪失。グループの存続は極めて困難になり、当該グループでの活動を断念せざるを得なくなりました。

素朴な生活をしてきた人に、突然大金の管理を任せられた場合、彼らは混乱せず、誘惑に流されることもなくお金の管理ができるのか？ 誰かにこう問われれば「そんなにうまくはいかない」と答えただけです。焦って活動していた当時の自分は、そんな発想を持つことも、それに気づくこともできなかった。



活動先の乳業組合の生産拠点。ここに生乳を集め、牛乳やヨーグルトなどの乳製品を生産していた



PROFILE

1990年生まれ、香川県出身。2014年、国際基督教大学教養学部を卒業後、パナソニック株式会社に入社。18年1月、民間連携ボランティア制度（現JICA海外協力隊〈民間連携〉制度）により、青年海外協力隊員としてケニアに赴任。19年1月、帰国。現在は、パナソニック株式会社の海外事業所にて、アフリカ大陸へのマーケティング、商品企画、営業企画業務を担当している。

活動概要

- 一村一品運動終了後の生産者グループの情報収集とフォローアップを行う。
- 赴任エリアのアクティブな生産者グループのマッピングおよびプロファイリング
- 生乳・ヨーグルト生産への助言と販路開拓による売上拡大支援 など

※現 JICA 海外協力隊（民間連携）制度

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G116

シンクロナイズドスイミング

※現アーティストックスイミング

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 7人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 代表選手の育成、コーチへの技術移転 など

類似職種 ▶ 水泳

※人数は、2020年6月30日現在。



ジャカルタチームの選手・コーチと石山さん（後列中央）。コーチ陣は石山さんより年長だったが、「常に学びの姿勢で敬い、協力してくれました」と石山さんは振り返る。演技の振り付けでは、ただ美しさを求めるのではなく、ジャカルタチームの選手に似合うものを優先した

#D233

建設機械

派遣中 ▶ 0人

累計 ▶ 134人

分類 ▶ 鉱工業

活動例 ▶ 建設機械の点検・修理や保守管理についての支援 など

類似職種 ▶ 自動車整備

※人数は、2020年6月30日現在。



山奥にある道路建設現場に出張し、現場周辺にある寺院の人たちや住民と交流する吉川さん（左から4人目）と現場スタッフたち

PROFILE

1994年生まれ、京都府出身。8歳でシンクロナイズドスイミングを始め、その後、AASFアジアエージ大会で優勝、FINA世界ジュニア選手権で準優勝などの成績を取る。2017年、同志社大学社会学部教育文化学科を卒業。在学中の16年より菓子店を開業、卒業後も継続。その後、青年海外協力隊参加のため閉業し、18年5月、協力隊員としてインドネシアに赴任。19年7月、現地スポーツ省と直接契約に至り、任期短縮し、帰国。その後ジャカルタへ渡り、国家青年スポーツ省ジャカルタ支部にて契約、ジャカルタ選抜強化チームの監督、指導者として強化、普及に携わる。

活動概要

ジャカルタチームの選抜、強化、インドネシアにおけるアーティストックスイミング（AS）の知名度向上のため、以下の活動を行う。

- 日本式の選考会の実施
- 基礎技術の指導
- 大会のための演技構成を作成
- 国内大会や海外遠征に帯同 など



いしやま じずか
石山紗江さん（インドネシア）
・2017年度4次隊

Q 活動の最大の困難は？
最も悩んだのは金銭的な問題でした。インドネシアでは、結果を出すところがある程度予算が下りるので、「結果を出すための予算」は下りにくい傾向にあります。メダルが取れずとも、大きな大会に出るチャンスがあれば出て、選手たちに大きな大会に対する免疫を付けてもらい、慣れてもらう必要があります。そのため予算とスポンサーの開拓が難しかったです。

Q メインの活動は？
メインの活動はジャカルタ選抜チームの指導でした。チームはインドネシア代表選手も多く有する、ジャカルタ特別州全域から選抜された14〜24歳の選手12人で構成されています。現地スタッフはカウンタートパートを含むコーチが4人いました。現場の外からは早く結果を出すことを求められ、今までは大会前の数カ月という短い期間で表面的に取り繕うことが多かったようです。基礎的な技術の習得や演技構成に時間をかけなければならぬので、長期戦略のための上層部の説得や、選手らとのコミュニケーション、予算の確保などが課せられた大きな課題でした。しかし半年が経つ頃には成果が見え始め、1年と少しが経った頃、チームで設定した1つ目の目標である国内のチーム種目全制覇と目標点数をクリアできました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

派遣国の選手やコーチは人それぞれですが、日本のように指導者の言うことを全員が真面目に聞くことはあまり期待しない方がいいでしょう。しかし、自分の言葉で思いを伝えれば、応えてくれる人はきっといます。開発途上国の人は我々よりもスポーツに夢を抱き、アスリートに憧れているように感じます。新型コロナウイルス感染症の影響で、普通の生活、普通の練習にはもう少し時間が必要かもしれませんが、私はスポーツが国を、国民を元気にしてくれると信じています。派遣国の方もきっと皆さんに期待を抱き、皆さんを待っているでしょう。

PROFILE

1981年生まれ、滋賀県出身。大学の経営情報学部を卒業後、建設機械の民間会社で13年勤務。営業・修理メンテナンスなど建設機械を直接扱う業務に携わる。2017年10月、青年海外協力隊員としてブータンに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

ブータンの農林省管轄、農村道路建設などを行う組織中央機械化センターにて、保有農道建設機械、油圧ショベル・ロードローラーなどの維持管理向上のため、以下の活動を行う。

- 修理技術者への故障前メンテナンスのマニュアル作成・実施
- 機械運転者への機械チェックマニュアルの作成・実施
- 修理工場内の修理設備・部品庫の5S
- 山奥の建設現場への出張修理 など



よしかわ かずお
吉川華人さん
（ブータン・2017年度2次隊）

Q 活動の最大の困難は？
機械の故障に対する考え方の違いをどうわかってもらうかということに一番時間を費やしました。私は壊れる前に修理する予防保全が重要であると考えていましたが、現地スタッフは消耗部品を定期交換するまでで必要十分であるとの考えでした。機械運転者からの報告や、修理技術者が修理の際について点検するなど、ちよつとした気配りで解消できる予防保全という方法が、日本式の過剰サービスと捉えられたこともありました。

Q メインの活動は？
建設機械の故障前メンテナンスの向上です。機械運転者は100人程、修理技術者は10人程でしたが、故障後の対応が主となっていたため工事現場のストップ、修理の長期化が問題になっていました。農道建設を進めることが配属先の役割だったので、いかにして機械が稼働し続けられるかを活動のメインに設定しました。

修理技術者は時間をかければ故障を直せたため、修理発生時には故障箇所以外のメンテナンス点検を同時に実施し、必要部品の確保、次回の修理計画の作成などを行いました。機械運転者には故障後の報告ではなく日常的に点検し、異常が出る前に報告ができるように、点検方法と、あるべき工具の確認表作成などを行いました。

Q どう解決しましたか？

修理記録の管理と修理内容の連絡です。修理技術者には修理記録を残してもらいました。1つの故障が後日どのような修理に発展するのか意識してもらい、機械へのダメージがどう分散されているのかを想像しやすくしました。これにより、予防保全によって近日常別の箇所を修理する必要がなくなることを理解し、過剰なサービスではなく仕事量の削減という自分たちのためだと感じてもらえました。機械運転者には修理内容の連絡をしてもらうことで、日常の報告と予防保全の関連性に気づいてもらえました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

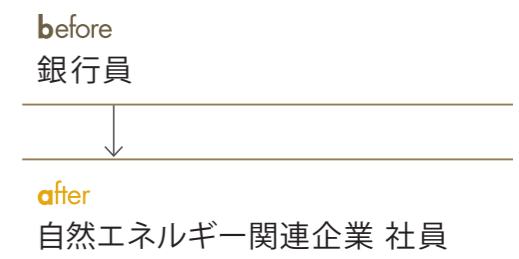
建設機械は現場で稼働してこそ輝きます。現場の地域環境や住民たちとの交流、建設物が今後どのような効果を生み出すのか感じられることは、この職種ならではの醍醐味です。また、活動中は予算・人員・備品と必要な物が多く出てきます。派遣国にないものをどう代用するか、入手方法はどうかかなどを考えることを楽しんでください。車の車検のような制度がない場合、動けば良いというのが1つの正解の場合もあります。完璧でなくとも安全で未永く使えることが目的のときは、現地に馴染む方法を現地の人と一緒に考えていくのが良いと思います。

Q どう乗り越えましたか？

特に画期的な解決策とはいえませんが、説得できる語学力やコミュニケーション能力、自身の意見が通りやすくなる環境や人間関係をつくることに必要でした。信頼を得るために、限られた環境でも結果を出すことや、本気でチームのことを考えていると理解してもらえよう行動しました。心がけたのは、彼女らのことを尊敬していると言葉にして頻りに伝えること。また、優先すべきところや見習うべきところを見つけ、評価し、採用しました。そうするうちに信頼関係が築けていったと自負しています。



JICA Volunteers!
before ▶ after 人生を変えた2年間



木質バイオマスボイラーの点検作業をする現在の佐藤さん。木質バイオマスボイラーで使用する燃料は、未利用の間伐材や製材工場などで残った木材、建造物を解体する際に出る木材など。同機材はオーストリア製で、輸入や設置のための調整業務を佐藤さんが担当している

ソーラーワールド株式会社

設立：2009年
(開設は1997年)

住所：山形県天童市
鎌田2-1-11

業務内容：自然エネルギー機材の
卸販売・施工など。

従業員数：8人
(2020年5月現在)

URL: <http://solar-world.jp/>

業務の一環として、学校などで
仕事と協力隊活動の紹介も行っている

2018	2016	2013	1990
after	JICA Volunteer	before	
6月、ソーラーワールド株式会社に入社。	1月、帰国。	3月、新潟大学法学部法学科卒業(国際法ゼミ)。	山形県出身。
		4月、株式会社りそな銀行にて法人渉外・融資業務に従事。	
		1月、青年海外協力隊に参加。マラウイの南部に位置するプランタイヤ県内の農業普及所に配属され、改良カマドの普及に取り組み。薪の消費量、購入費および薪集めに費やす時間の削減に貢献した。	

同社の社長が過去にバングラデシュで太陽光の技術指導などをしてきたと知り、業界研究をしたと訪問。求人をしてることがわかり、受験した。

自分が役立てるのか自信がなかったが、募集説明会の会場で協力隊経験者から伝えられた「興味があるなら応募したほうがいい」という言葉に背中を押され、応募。合格できた。

高校時代に「ルワンダ虐殺」のことを知り、国際協力の道を目指した佐藤さんは、大学生、社会人を経て、協力隊に参加。マラウイでの活動を通じ、エネルギー分野で開発途上国の支援をしたいと、帰国後は再生可能エネルギーの関連機材を取り扱う企業に就職した。

次の世代のためにできること

高校生のときルワンダ虐殺のことを授業で知り、「同じ時代に起きた出来事に対して、自分にも何かできないのか」と思った。

「私自身、あまり裕福ではない家庭で育ち、いろいろなことを人一倍頑張らないといけませんでした。だから困っている人の役に立ちたいという気持ちがあったのだと思います」

将来的に国際協力を仕事にしたいと、国際法を学べる大学に進学。しかし、実際に何ができるのかがはっきりせず、就活シーズンが到来してしまう。学校にリクルートに来ていた銀行を受け、採用が決定。法人営業を担当することになったので、いろいろな業界を見て次のステップを考えようと思った。

法人営業の仕事をして2年目、「自分は厳しい環境にいる人の役に立ちたい」と思っている

「10年、待てません」

マラウイ・コミュニティ開発・2015年度3次隊
佐藤博亮さん



マラウイで協力隊員として活動する佐藤さん。イラストを用いて改良カマドを取り入れるメリットを現地の人に伝えた

どの地球資源は残っているのかと疑問に思っている。限りある資源を活用する再生可能エネルギーの必要性を感じるようになりました。

改良カマドの普及だけではなく、現地のためにもっと何かをしたかったが、専門的な技術も知識も足りない。佐藤さんは現地の人に「専門的なスキルを身につけて戻ってくるから、10年待っていて」と伝え、日本に帰った。

再生可能エネルギーを途上国に

地元の山形県で就職活動を始めた佐藤さんは、再生可能エネルギー関連の企業を探し始めた。いつかマラウイに貢献する仕事に就くことを目標としていたので、仕事を通じて開発途上国に貢献する精神を持った経営者のもとで働きたいと思っていた。そのことを青年海外協力隊相談役に相談したところ、県内に再生可能エネルギーを扱い、社会貢献活動にも注力している会社があることを教え

たのに何をしているんだろう」と感じることで増えていた。そんなとき、電車内で協力隊募集の中吊り広告を見て、次のステップを踏み出す決意をし、応募。合格した。

マラウイ南部にある農業普及所に配属され、電気・水道が普及していない農村部で活動することになった佐藤さん。現地の人の生活の質の向上を目指すため、着目したのがエネルギーだった。従来の3つ石ストーブを熱効率の良い改良カマドにすることで、薪の消費量や購入費用、薪集めに費やす時間を削減できる。そう考え、普及活動に取り組んだ。

活動当初、現地語がうまく話せない佐藤さんを現地の人は優しく迎え入れてくれた。伝えたいことを理解し、ともにカマドづくりに取り組み、つくった後は一緒に食事をした。「マラウイの人に活動をさせてもらった」と佐藤さんは当時を振り返る。

「日本も昔はこういうカマドを使っていた」と佐藤さんは現地の人に話したことがある。すると「孫の世代は将来日本のような生活ができるようになるかしら」と言われた。

「どの国の人も『次の世代にはよりよい生活を』という願いがあるのだと知りました。しかし、現地の人が希望する生活に近づけるほ

られ、会社を訪問。話を聞くと、海外からの輸入商材を扱っており、語学ができる人を求めているとわかった。佐藤さんは就職試験を受け、合格。太陽光発電など自然エネルギー機材の卸売販売や施工などを行う、ソーラーワールド株式会社に入社した。

現在営業部に所属し、自然エネルギー機材の営業活動や、一般家庭から太陽光発電設置の依頼があった際の現地調査や見積もり、施工の段取りなどを行っている。機材の施工は担当者が行うが、簡単なメンテナンスや修理は佐藤さんでもできるようになった。また、海外営業として、オーストリアから仕入れる商材の調整業務も担当し、設備設計や見積もりなど日本と海外のやりとりをサポートする。

「語学力に加え、協力隊の活動で学んだ選択肢を提示する力が役立っています。現地の生活を強制的に変化させるのではなく、取り入れてもらうための長所、短所を伝えて現地の人に選んでもらう。無理に導入しても継続した利用は期待できないからです。現在もその考え方を下地にお客様とお話ししています」

昨年は、太陽工学を専門とするナイジェリアの留学生の受け入れも担当。彼女を通して、今後ナイジェリアで小規模太陽光発電設備の太陽光発電キットを販売する準備もしている。仕事を通して技術や知識を得ることで自身の成長を日々感じることができ、「マラウイで役に立っている人間になり、現地に帰るといのが仕事のモチベーション」という。

8年後、「待っていて」と伝えたマラウイの人が住む地域や、途上国の未電化地域に小規模太陽光発電設備を普及する。その目標を現実にするため、佐藤さんは働いている。

*3 青年海外協力隊相談役・帰国隊員の進路開拓をサポートし、全国に配置されている。詳細は https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

*1 3つ石ストーブ…熱源の周囲に3つの石を置き、その上に鍋などをのせて利用する。熱伝導率が悪く、大量の薪を必要とする。
*2 改良カマド…熱源の周囲をレンガで囲い粘土で固めたカマド。熱伝導率が良く、薪の使用量が少なくて済むが、定期的なメンテナンスが必要。

よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。



【座談会参加者】

Cさん(女性)

【派遣前】
病院的栄養科職員など
【協力隊】
▶退職参加
・栄養士
・アフリカ
・2015年度派遣
▶病院に配属され、エイズによる低栄養の患者、高血圧や糖尿病の患者などへの栄養指導に従事
【現在】
国際協力事業を行う法人の職員

Bさん(女性)

【派遣前】
学校栄養職員、病院の栄養科職員、市役所の特定保健指導員など
【協力隊】
▶退職参加
・栄養士
・大洋州
・2014年度派遣
▶病院に配属され、院内や地域の学校での栄養教育などに従事
【現在】
大学の教員

Aさん(女性)

【派遣前】
地方公務員(県職員)
【協力隊】
▶現職参加
・栄養士
・中南米
・2014年度派遣
▶県の保健行政を統括する機関に配属され、栄養失調児の削減などに従事
【現在】
復職

A 派遣前は地方自治体の管理栄養士として、出先機関の保健所で公衆栄養業務を担当していました。協力隊は現職参加で、県の保健行政を統括する機関に配属され、栄養失調児の削減などに取り組みました。帰国して最初に配属された部署は本庁で、県の栄養行政の立案などに携わりました。その後、県立病院に異動し、患者の栄養管理をする業務の担当となりました。現在に至ります。

B 管理栄養士として学校栄養職員、病院の栄養科職員、市役所の特定保健指導員などを務めた後、退職して協力隊に参加しました。協力隊では病院に配属され、患者や地域の子どもの栄養教育に取り組みました。帰国後は、管理栄養士として診療所に勤務した後、栄養士養成校への勤務を経て、今年度から管理栄養士養成校である大学の教員となり、栄養教育や国際栄養などの授業を担当しています。同時に、社会人として大学院に進学し、栄養教育に関する研究も始めています。

C 管理栄養士として病院の栄養科などに勤務した後、退職して協力隊に参加しました。協力隊時代の主な活動は、病院でエイズによる低栄養の患者や、高血圧、糖尿病の患者などに栄養指導を行うことでした。帰国後は大学院に進学し、協力隊時代の配属先をフィールドにした食事調査で公衆衛生学の修士号を取りました。その後、国際協力事業を行う法人に就職し、ODA事業の業務調整など栄養士の専門性とは関係がない仕事に携わっています。その本職のかたわら、東南アジアの地域高齢者へのリハビリ普及を目的としたNPO法人のメンバーとして、その活動に栄養士の立場でかか

わっています。

「同じことをやってはだめ」

A 私は派遣前、保健所でデータ処理など現場とは少し離れた業務を担当していました。協力隊で住民を相手に栄養教育を行う活動などに取り組んだところ、それをとても楽しく感じ、「私は『現場』の仕事が好きなのだ」と確認できました。ところが、帰国して最初に配属された部署は、出先機関を取りまとめるような立場にある本庁の部署で、そこでの業務は「現場」がとて遠く感じられるものでした。そうして、復職して1年ほどは、「退職して、もう一度協力隊に参加したい」と悩む日々でした。ようやく「自分が置かれている場所のできることを、もう少し探してみよう」と気持ち切り替えることができたのは、JICAの技術協力プロジェクトの専門家も務めていらっしゃる栄養士隊員OGの方にいただいたアドバイスがきっかけでした。彼女に悩みを相談した際、「成長していないうちに、また同じことをやっても意味がない」という趣旨の言葉をいただきました。それを聞き、「たしかに今、派遣国に戻ったとしても、前回と同じような貢献しかできない」と思い、今の職場でしっかりと経験を積もうと思えるようになったのでした。その後、病院に異動となりましたが、初めて経験する臨床の現場なので、日々、新鮮な気持ちで業務にあたることができました。

C 私は帰国した当初、海外とのつながりが少ない病院勤務に戻るのにはつらいと感じ、なかなか進路を定められずにいました。その時

いただき、今の道へと進むことにしました。日本では「海外を経験している栄養士」が少ないため、私に声がかかったのだらうと思っています。

C 海外を経験すると栄養に関する視野が広がるので、海外経験がある栄養士は栄養学科の教員に適任であると思います。私は協力隊経験を通じて、「栄養士は栄養以外のことに幅広く目を向けなければならない」という考えが強まりました。任地では、経済的な理由で手に入られる食材に限りがある住民もいます。そのため、食事指導だけでは不十分で、現地の社会的、文化的、経済的な状況を理解し、可能な栄養改善の方法を見つけ、提案していかねればならなかったからです。

B 私も協力隊経験によって栄養に関する視野は広がったような気がしています。途上国の栄養に関する問題について、派遣前は「貧しいがゆえの低栄養」というイメージを持っていました。ところが、派遣国の主な栄養問題は「肥満」でした。雨量も豊富で、元来、食事はイモ類を主食とする栄養バランスのとれたものだったのですが、安価で料理の手間もかからないインスタント食品などの輸入食品が流通し、肥満が増加していきました。栄養に関する問題は、その地域の状況と密接に関連していることを協力隊経験で学んだわけですが、そうした学びは、栄養士の卵の学生に積極的に伝えていきたいと考えています。

A 私は協力隊時代、気候変動による干ばつの増加で低栄養の人が増えてしまっている地域があるなど、栄養に関する問題は「環境問題」にもつながっていることを初めて知りました。そうした学びがあったことから、栄養

期に、Aさんがお話しされたのと同じ栄養士隊員OGの方にお目にかかる機会があり、同じようなことを言われました。進学して、公衆衛生を学ぶと決めたのも、その助言の影響が大きかったです。

A 勤務先には大学院進学のために休職することを認める制度もあり、私も帰国後、大学院への進学を考えたいことがあります。しかし、仕事で慌ただしく、実現できずにいるのですが、おふたりは大学院に進学するのにあたり、ためらいはなかったのでしょうか。

B 私はまだ進学したばかりで、「大変さ」を感じるのはいくつかだと思っております。大学教員の道を進み続けるためには修士号が必須ですので、覚悟を決めて修士に漕ぎ着けたいと考えています。

C 大学院については、修士号取得がゴールではなく、修了後も経験を積み、力を蓄えていかなければならないと感じています。私は現在、「会計」などのビジネススキルを身に付けたいと考え、管理栄養士の資格がなくてもできるような仕事に就いており、今後も経験やスキルを生かした仕事に就きたいと考えています。

栄養についての視野の広がり

B 私は帰国後、おふたりのように「もう一度国際協力の現場に戻りたい」と思ったことはなく、むしろ「協力隊経験を生かして、地域に貢献したい」という思いが強かったです。そうしたなか、私が栄養学を学んだ母校の先生から、「大学の教員にならないか」とお声がけ

の専門職で働いている立場として、栄養の問題につながりがあるさまざまな事柄に視野を広げていくことは、これからもしっかりと続けていくことが重要だと感じています。

C 「栄養の問題には、栄養以外のさまざまな要因が背景にある」という、私たちが協力隊経験で得たような気づきを、日本の現場で働く栄養士と共有したいです。そのためには、日本の栄養士が海外の栄養士と交流し、日本とは環境が違う国の栄養の問題について知ることができる機会があればと考えています。協力隊はそうした機会の1つですが、日本の現場で仕事をしながら参加できる短期のプログラムがあれば、より多くの人が参加できます。

B 今のお話を伺い、栄養士の養成に携わっている者として、大きな仕事のヒントを得たと感じました。栄養士を目指す学生が海外の栄養士、あるいは栄養以外の専門性を持つ日本人たちと交流し、栄養に関する視野をぐっと広げる。そういう体験をするプログラムを、授業に取り入れていきたいと思いました。かつて授業で、海外の栄養に関することを調べ、レポートにまとめる課題を与えたのですが、学生たちが扱ったのは大半が欧米の国でした。今後は、経済的にも文化的にも日本との違いが大きい途上国のことにも興味を持ってもらえるような授業展開が必要だと感じました。

C 私も、現在携わっているNPO法人の活動として、日本の栄養学生や現役の栄養士さんを東南アジアの活動フィールドにお連れし、栄養に関する現地の状況を知っていただくようなプログラムを実現できればと考えています。

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

協力隊フィリピン OB/OG会

会の目的

- 1 会員相互の親睦を深める。
- 2 フィリピンとの友好親善に努める。
- 3 フィリピンへの国際協力の可能性を探る。



2019年の「グローバルフェスタJAPAN」に出展したブースで、運営に参加した会員たち

Outline

正式名称 協力隊フィリピンOB/OG会
法人格 任意団体

Organization

代表者 中垣長睦
(フィリピン・園芸作物・1970年度2次隊)
会員数 255人
入会資格 当会趣旨に賛同する人(協力隊経験者(派遣国を問わない)、JICA職員など)

会費 5000円(入会時のみ、永年会費)

Management

最高意思決定機関 会員総会
会員総会の頻度 毎年4月に開催
役員会の頻度 月に1回
会員・役員間の連絡手段 メールリスト

Contact

問い合わせ窓口 ① jcvph-obog-admin@googlegroups.com
② https://www.facebook.com/jcvphilippinesobog
情報発信の手段 https://www.facebook.com/jcvphilippinesobog

フィリピンに初めて協力隊員が赴任したのは1966年。以来、これまで同国で活動した協力隊員は1700人近くに上り、5本の指に入る派遣規模の国となっている。同国で活動した協力隊員を主な会員とする当会の特徴的な活動は、5年に1度のペースで実施している、フィリピンの首都マニラでの懇親会の開催だ。当会の会員だけでなく、彼らの協力隊時代のカウンターパート、および同国で活動中の協力隊員などが一堂に会し、互いの近況を報告し合う催しである。すべての協力隊員にとって、カウンターパートがその後、どのような人生を歩んでいるのか、自分と共に過ごした日々がそこにとどのような影響を及ぼしているのかは、大きな関心事。この懇親

会は、現役の隊員や任期を終えてもない協力隊経験者にとって、自身の活動の長期的な意義を確認できる場にもなっている。2013年に台風「ヨランダ」でフィリピンが大きな被害を受けた際には、支援のための募金活動や、現地の隊員からの情報を踏まえた物品の寄贈なども行った。「協力隊のOB・OG会としては大所帯だと思えますが、派遣時期や任地、職種、現在の住まいなど、会員の属性ごとに小グループをつくり、『分科会』のような活動をすることも進めていければと考えています。理事の高齢化が進んでいるなか、柔軟かなアイデアを提供していただける若い世代の協力隊経験者の参加をお待ちしています」(中垣代表)

青年海外協力隊 幼児教育ネットワーク

会の目的

- 1 会員間で情報交換を行う。
- 2 日本の幼児教育関係者に向けて協力隊の広報活動を行う。
- 3 幼児教育隊員への後方支援を行う。

職種別OB・OG会の第1号として当会が設立されたのは1993年。会員は現役の保育士や幼稚園教諭が多く、当会の活動と本業の両立が常に課題となっているなか、「無理をしない」をモットーに、職種別OB・OG会らしい活動を地道に重ねてきた。その1つは、「勉強会」の定期開催だ。帰国してまもない幼児教育隊員の活動報告、日本の幼児教育分野の第一人者による講演などで構成するもので、帰国後も幼児教育に携わっている会員にとっては、幼児教育についてあらためて視野を広げる学びの機会となっている。

ほかに職種別OB・OG会らしい活動として、JICAの研修員受入事業で幼児教育分野のプログラムが実施される際に、研修員たちの母語を話せる会員がワークショップに参加し、サポートにあたることもある。現在は、外国人の子どもたちが通う幼稚園や保育園で生じている、異なる文化を受け入れるうえでの混乱に對して、現場と子どもたちの間の橋渡しができないかと模索している。「幼児教育隊員として途上国の保育を見てきたからこそ、日本の保育の課題が見えることがあります。日本の保育の課題に関して認識を分かち合ひ、意見交換を行えることが、当会の会員の楽しみの一つとなっていますが、課題の解決に向けた取り組みにも、会として力を入れていきたいと考えています。そこに協力隊経験者ならではのパワーを発揮したいという方の入会をお待ちしています」(久保田代表)



会員がサポートに入って実施された、JICAの研修員受入事業のワークショップ

Outline

正式名称 青年海外協力隊幼児教育ネットワーク
設立時期 1993年7月
法人格 任意団体

Organization

代表者 久保田美幸
(マレーシア・保育士・1989年度1次隊)
会員数 115人
入会資格 幼児教育隊員で、帰国後に入会の意志を示した人
会費 2000円/年

Management

最高意思決定機関 会員総会
会員総会の頻度 毎年7月に開催
役員会の頻度 年に5回
会員・役員間の主な連絡手段 メールリスト(ウェブ会議の導入を検討中)

Contact

問い合わせ窓口 JOCVyoukyou@aol.com
情報発信の手段 —

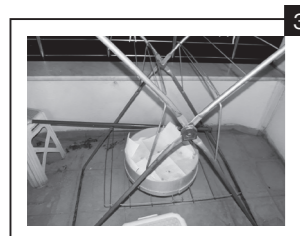
知ったく情報

保存食づくりに挑戦

ナビゲーター = 里見洋司さん
(シニア海外ボランティア/トルコ・野菜栽培・2014年度2次隊)
※派遣名称は派遣当時のものです。

煮干しをつくってみよう

秋が深まるとトルコの黒海には、カタクチイワシ（現地名：ハムシ）の収穫シーズンが到来します。価格は1キロ（100匹以上）が約130円。水揚げされたばかりなので鮮度は抜群です。現地のイワシ料理は、油を敷いた特性フライパンで焼くもので、煮干しはありません。黒海沿岸の冬場の気候は日本並みに寒く、しかもどんよりと曇っています。さらに、夜間は石炭暖房の煙が立ち込めていて好条件とはいえませんでした。📌



③ ふるいを天日当たる風通しの良いところに置き、乾燥。夜間は、煙害を防ぐため、ペーパータオルを覆った。

【材料】

- イワシ…500g
- 塩…40g (水の重量の2%)
- 水…2ℓ



④ 乾燥4日目。季節や天気によって乾燥具合が違い、湿度が高いときなどは、腐敗したりカビたりしてしまう可能性もあるので、要注意。



① 大きめの鍋に水と塩とイワシを入れる。沸騰してから約5分、煮る。沸騰後は火力を調整し、蓋を半分くらい開け、吹きこぼれないよう注意。吹きこぼれるとイワシの身が崩れてしまう。



⑤ 乾いて固くなったら完成。乾燥し切らなくてもおいしい生干しを楽しめます。生干しの場合はカビやすいので、冷蔵庫か冷凍庫で保管し、早めに食べきましょう。



② 殺物用のふるい（ネットやザルなどでOK）にペーパータオルを敷き、イワシを広げて乗せる。箸などで丁寧に水を切って乗せるのがきれいな煮干しをつくるコツ。

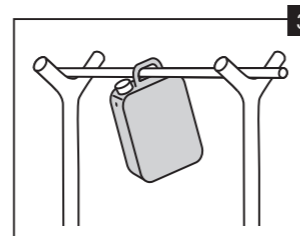
活動に役立つアイデア

手洗いの啓発活動②

松岡由真さん
(ベナン・感染症・エイズ対策・2017年度1次隊)

ティッピータップのつくり方

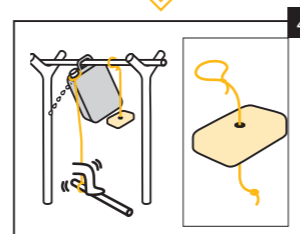
前号でご紹介した「正しい手洗い」で手洗いの大切さがわかったところで、手を触れなくても水が出る、ティッピータップを現地の人と一緒につくります。製作に必要なものはできるだけ現地の人々に集めてもらうことが重要です。中に入れる水はきれいな水でなければならないことを強調し、できればその場で誰かが水を補充するのか、どこから水を持ってくるのか、ということも決めておくと、より持続的に活用してもらえます。📌



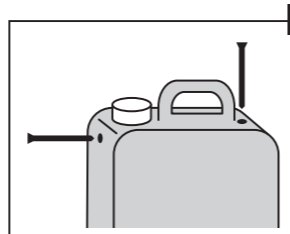
③ ②の棒に長い棒を渡す。このとき、プラスチック容器の手持ちの輪の部分を通してぶらさげる。

【用意するもの】

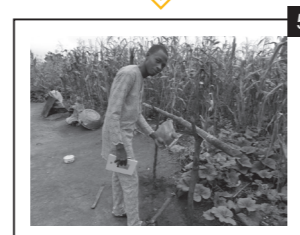
- Y字の棒…2本
- まっすぐな長い棒…1本
- まっすぐな短い棒…1本
- ヒモ…約2メートル
- プラスチック容器（油や洗剤が入っていたもの）…1個
- 穴をあけられる千枚通しのようなもの。釘でも可。



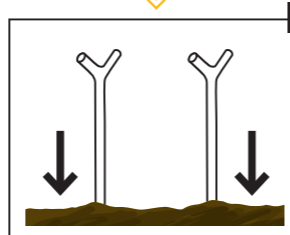
④ 踏む用の棒とプラスチック容器のキャップをヒモでつなげる。足元の棒を足で踏むと容器が傾くように長さを調整し、必要であれば石けんも穴をあけてヒモを通し、木の棒にぶら下げる。



① プラスチック容器の側面、キャップのすぐ下の部分に水を出すための穴をあける。水を出す穴から一番離れた上部に空気抜き用の穴をあける。



⑤ 完成。



② 地面にY字の棒を突き刺す。

生活に役立つ技

好きな布でネクタイをつくろう!

ナビゲーター = 吉永紀子さん(ルワンダ・服飾・2014年度1次隊)

【用意するもの】

- 表布…タテ50cm×ヨコ60cm程度
- 裏布…薄手の布（サイズは表布と同じ）
- 糸…太さは50～60番の普通地用
- 手縫い用の針、またはミシン
- マチ針
- ハサミ
- 定規
- チャコペン（鉛筆やチョークでも可）
- アイロン



【仕上がりサイズ】
長さ：約140cm 幅：約8cm

ミシンでも手縫いでもつくれるネクタイ

縫い目は全て内側になるので、ほつれなども気になりません。工程は①布を斜めに裁断 ②剣先（とがっている部分）を縫う ③半分に折り、縫い合わせる ④ひっくり返して整える、の4工程です。パイアス（斜め45度）裁ちにすることで、首になじむようになります。ネクタイの正面にどのように柄を持ってくるかを考えて生地を裁つと、素敵な1本が出来上がります。📌

⑤ ①を開き、上部分を中心線から左右対称になるように裁断する。

④ 斜めの部分をさらに4センチ折り、裁断する。

③ 切った後の、残り部分が大きい方の布を使う。

② 折り目から直角に、上側4センチ、下側8センチの場所に印をつけて線で結び、裁断する。

① 表布を中表に三角（45度）に折る。

⑩ ひっくり返して、目打ちやまち針を使って角をしっかりと出し、アイロンで整える。裏地側に表布が少し見えるように整える。

⑨ 両脇からそれぞれ中央部に向かって縫い、余った布を縫わないようにする。縫いどまりから3ミリ残して縫い代を切り落とす。

⑧ 裏地から両サイドを1センチずらして表布を合わせる。表布の中央に布が余るようにする。

⑦ 裏地の大きい部分のとがった部分を1センチ切り落とす。

⑥ 裏地を裁断する。大きい部分は同じサイズ、小さい部分は脇の直線部分4センチで裁断する。

⑫ 大きい部分と小さい部分の尖った部分と反対側を、5ミリずらして中表に合わせ、5ミリの縫い代で縫う。

⑪ 小さい部分の裏地も同じように縫い付け、ひっくり返す。

⑬ 1本のヒモ状になったら、裏地と一緒に半分に折り、5ミリの縫い代で直線を縫う。

⑭ 縫い代を開くようにアイロンをかけ、ひっくり返す。ひっくり返すときは、片方の端にヒモを結んだ安全ピンをつけ、ヒモを間に通してから引っ張ると、返しやすい。

先輩隊員の シューカツ記

就職先：
インパック株式会社
(民間企業：製造・販売・輸入業)

事業概要：花の包装用資材の製造事業、エチオピアからバラの直輸入販売事業 など

シューカツ START

帰国直後 **情報収集を開始**
青年海外協力隊相談役、国際キャリア総合情報サイトPARTNER、民間の転職サイトを利用。また、JICAエチオピア事務所にも相談し、エチオピアにかかわれる仕事を探したが、関連企業情報は非常に少なかった。

応募開始 (1次試験：書類)
応募書類は、カバーレター、履歴書、職務経歴書。書類は作成後に第三者に見せ、アドバイスを貰うと、自分では気づかなかった改善点が見つかる。何度も書き直して、中身を煮詰めていくことが大事。
*カバーレター…履歴書、職務経歴書を送る際の送り状。

GOOD POINT!

自分の興味・関心ある企業が、希望職種の採用をしているかどうか分からない場合、相談役からの助言で送ったダイレクトメール(企業・団体のトップ宛に応募書類を直接送付すること)は有効な手段だと感じた。

帰国5カ月後 **2次試験 (面接)**
面接では、「志望動機」「前職(旅行会社)での職務内容」「協力隊活動の内容」を聞かれた。「この仕事をしたい」という気持ちを真っ直ぐに押し出すことができた。面接までに協力隊を含む自分の経験を棚卸して見つめ直し、自分がやってきたことに自信を持って面接に臨むことが大事だと感じた。

帰国6カ月後 **内定**
応募した数…10社
書類選考通過…4社
内定した数…2社

シューカツREVIEW

自分の中の「エチオピアにかかわる仕事がしたい」という気持ちを貫いたところが、就活の成功につながったと思う。

就職!

青年海外協力隊相談役による シューカツの総括



みなと かずお
湊 和生さん
担当地域：北海道

鈴木さんと面談して明確であったことは「エチオピアにかかわる仕事をしたい」でした。ダイレクトメール(DM)を勧めた理由は、「①応募企業への志望動機が明確かつ強い ②どのような仕事をしたいのか、どのような形で当該企業に貢献できるか明確 ③やりたい業務の求人が顕在化していない」。鈴木さんは、職務経歴の棚卸(協力隊活動も含む)をしっかりと、それを応募書類作成、面接に活かすことができました。皆さんにも、就職したい企業が中小企業の場合、DM(社長宛)という手段もあることを知っていただきたいと思います。

✉ Minato-Kazuo@jica.go.jp

●経歴：航空会社で接客や財務、人事、CS推進などに携わった後、人材会社でキャリアカウンセラーとして早期退職者の再就職支援や職業紹介、キャリア形成支援に従事。2012年にJICA進路相談カウンセラーとなり、現在は青年海外協力隊相談役。

すずかわまさみ
鈴木雅未さん(エチオピア・観光)

・2016年度3次隊)

出身地 北海道
生まれた年 1986年(帰国時の年齢：32歳)
略歴

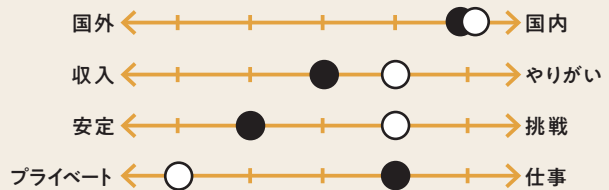
- 2010年、名古屋大学卒業後、旅行会社に約5年間勤務。
- 2017年1月、青年海外協力隊員としてエチオピアに赴任。エチオピアの南部諸民族州文化観光局で観光促進などに携わる。
- 2019年1月、帰国。
- 2019年8月、エチオピアからバラを輸入・加工・販売等する会社に就職。現在は主に、日本国内の販売へ向けた営業活動をしている。

自己PR

強み	新しい知識を積極的に学び、吸収する力。信頼関係を構築する力。挑戦し、やり切る力。アムハラ語(エチオピアで広く話されている言葉)。
弱み	前職から約4年間仕事のブランクがあること
有する資格	総合旅程管理主任者、総合旅行業務取扱管理者
アピールできる経験	前職の営業経験

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前=● 協力隊参加後=○



仕事選びで一番大切にしていたことは？

エチオピアにかかわる仕事に就くこと。

就活をとおして一番苦労したことは？

就活前に、どこに住んで働くか(海外か日本か? 地元か東京か?) が定まらず、スタートが切れませんでした。周囲の人は次の進路をどんどん決めていき焦りました。しかし、エチオピアに再渡航し、考える時間をつくったことで、その分開始は遅くなりましたが、ブレない就活の軸ができました。

協力隊経験をどう伝えましたか？

「職務経歴書」の中に、協力隊の活動で特に力を入れたことを3つピックアップして、各150字程度にまとめて記入しました。それぞれ「私の考える現地の抱える課題→課題解決のために取り組んだ活動」という風に、思考・計画・行動がわかるように記述。厳選したので、面接でこれらに関する質問があっても、自信を持って落ち着いて答えることができました。

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

▶ https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。

※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

バドミントン界のITインフラづくりをサポートする

青年海外協力隊に参加し、ドミニカ共和国でバドミントン代表選手のコーチとして活動した伊藤幸太さんは、帰国後、「株式会社minton（ミントン）」に就職。バドミントンの試合にウェブサイトからエントリーできるシステムなどを提供する同社で、バドミントンにかかわる人たちをつなぐ仕事をしている。

株式会社 minton
EC事業部リーダー
いとうこうた
伊藤幸太さん
(ドミニカ共和国・バドミントン
・2016年度3次隊)

バドミントン界のITインフラを創る、をスローガンに掲げる株式会社minton。ウェブ上から試合にエントリーできるバドミントンポータルサイトを始め、バドミントン用品のオンラインストア、スポーツ協会向けのウェブサイト制作サービスなどを提供している。

同社で働いているのが、協力隊経験者の伊藤幸太さんだ。2019年1月に協力隊の活動を終え、4月にmintonに入社。同社は16年に設立された新しい会社で、伊藤さんは現在EC事業部リーダーとして事業の提案や営業活動、事業の運用などを行っている。

「社員は社長を含めて4人なので担当業務があるというより何でも担当します。各地域のバドミントン協会の担当者や話し、困りごとや要望を聞いてウェブエントリーなどの提案をする営業活動や、オンラインストアの商品の仕入、在庫調整、発送作業などもしています」

伊藤さんは中学時代にバドミントンを始め、大学卒業までバドミントン一色の生活を送ってきた。大学ではコーチングも学び、スキル向上のために異文化でのコーチングに興味を持った。そのとき協力隊のことを知り、参加を決意。その後、ドミニカ共和国でバドミントン代表チームコーチとして活動することになった。

「さまざまな価値観と出会い、自分の考え方の幅が広がる貴重な経験だった」と伊藤さんは協力隊経験を振り返る。ドミニカ共和国バドミントン代表選手の東京オリンピック出場を目指し、現地の選手やコーチ、バドミントン連盟とともに活動を開始。選手とコーチとは練習



mintonのオリジナルグッズのTシャツを着た伊藤さん。今後、オンラインストアで販売するTシャツの生地を協力隊の派遣地域であった中米から仕入れることを検討するなど世界とつながる企画も考えている

を通して良い関係を構築できたものの、連盟の担当者とは良好な関係が築けず、悩む日々が続いた。指導について話し合うなど関係を築こうとしたが、伊藤さんの熱意は伝わらなかった。また、連盟の資金が正しく使われていないことや、連盟の不手際で選手が大事な大会に出場不可となる状況も見て、連盟の担当者と理解し合うのは難しいと考えるようになる。「悩み抜いた末、悩んでも仕方ない、次に進もうと考え、選手やコーチ、その他指導者との関係をより深めることにしました。人の価値観や考え方の根底には、育った環境や文化があるので、相手を変えることは難しい。寛容であることの重要性も学びました」

そして、この経験は現在の仕事でも役立っていると伊藤さんは話す。

「例えば、ある指示があったとき、何があったりもこう動くべき、という考え方を昔はしていました。でも状況は変化します。そのときの指示に加えて『現状はどうか』も合わせて考えることができるようになりました」

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、バドミントンの大会が相次いで中止となったときも、「今できることは何か」と考えることがで

きた。自粛期間中、mintonでは協会の方へのインタビューなどをブログで紹介。7月に入り、開催予定の大会も徐々に増えてきたようだ。

「スポーツは人々の生きる活力になる」と伊藤さんは言う。競技者も応援する人も一体感を持ち、熱中し、楽しい時間を共有する。競技者は、できないことをクリアする中で自分の芯ができて、生き方も学べると感じている。そんなスポーツの力と協力隊経験を生かし、伊藤さんには実現させたい事業がある。「今は漠然としているけど」と前置きし、話してくれた。

『「スポーツ」と「IT」は『国際協力』と相性がいい。スポーツに言葉はいらないと言われてたりするように、まさに世界の人々が共通して楽しめること。そしてITは世界をつなぐツールです。その2つを隊員経験でつなぎ展開することでビジネスにも国際協力にもなる。これらを使って、世界中のバドミントンにかかわる人たちをつなぐ新しい価値を提供したいと考えています」

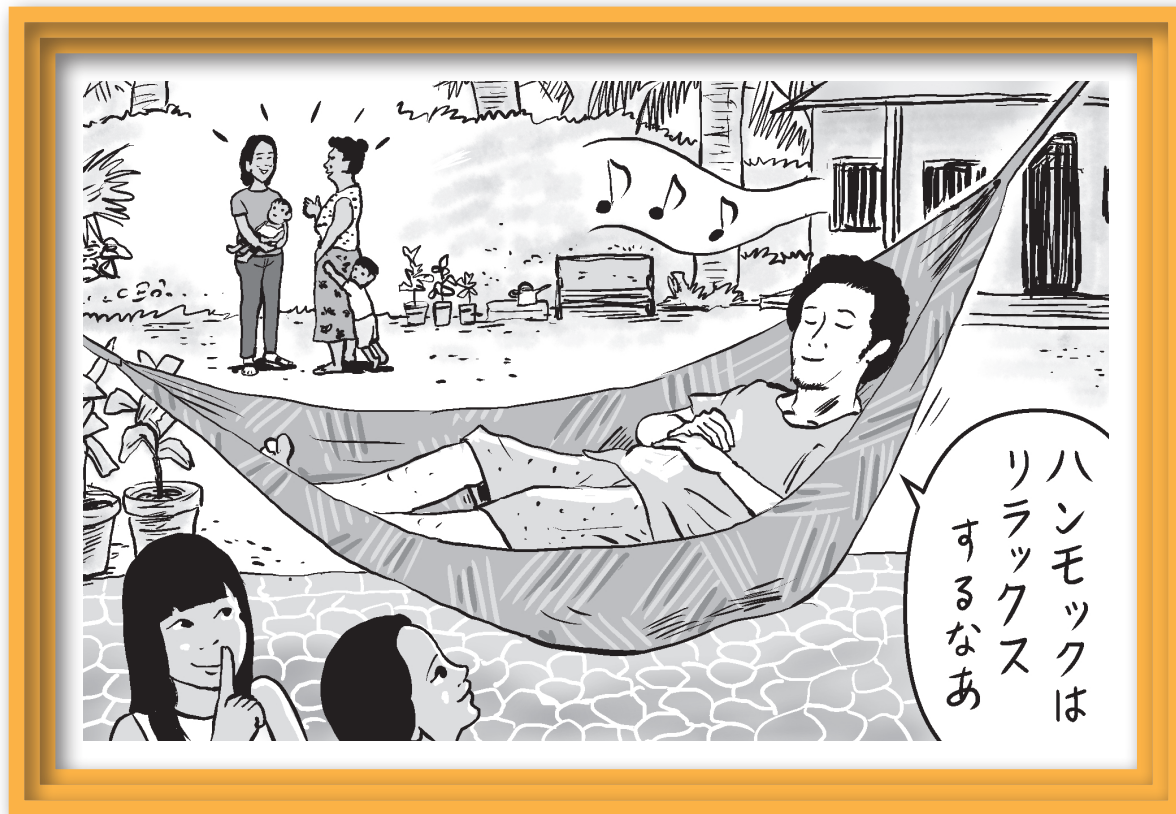
●プロフィール：1992年生まれ、東京都出身。2015年、東洋大学健康スポーツ学科卒業後、フィットネスクラブに就職。17年1月、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国に赴任。同国バドミントンナショナルチームのコーチを務める。19年1月、帰国。4月より現職。



仕事中の伊藤さん。オンラインストアでの販売キャンペーンなど実施したい企画はどんどん提案する

つぶやき

お題 ▶ 寝具



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

リラックスタイム

何でだろう、何も考えず、そよ風をただ感じ、寝ているだけで幸せな気持ちになれる。庭の周りから聞こえるノリノリのラテン音楽、そして常に笑いながら飛び交うスペイン語。そんな何気ない休日のひとときが僕にとってはリラックス時間。そんな僕に欠かせないもの、そう、それはハンモック。

ペンネーム：メグスタラシエスタさん(中南米・体育・2019年度派遣)

★束の間の休息

教員養成学校の昼休憩。職員室からは、同僚の先生たちの笑い声が聞こえ、昼ご飯のいい匂いがする。ゴザを敷く。円になって持ち寄った食材をみんなで食べる。片づけた後は……川の水になって……昼寝！ 積み上げられた枕は、このためか。ゴザと枕と同僚たちがいるという安心感が揃った束の間の休息。この時間が、いつしか私の楽しみにもなっていた。

ペンネーム：満月さん
(アジア・小学校教育・2019年度派遣)

★★スマイル

任地での生活を始めるにあたり、まずは寝室づくりからスタート。掃除を終え、大家さんと一緒に木製ベッドを組み立てる。ようやく完成し、ベッドを配置すると、「このベッドの下にカーペットを敷くにはどうしたらいいかな？」と笑顔の大家さん。計画性も大事だけど、笑顔の方がもっと大切だなあと気づきました。

ペンネーム：丸顔さん
(アジア・理科教育・2019年度派遣)

★★★あるものが寝具

バイク上で器用に横になって寝る運転手たち。私も彼らのように不安定な長椅子の上など場所を問わず寝られるようになりました。蚊帳で結界を張った快適なマットレスの上ではなく、暑い時間帯に配属先のゴザで子どもたちと寝る。暑い狭い固い、体にゴザの跡がつくけど至福の時間。

ペンネーム：猫とパーニュさん
(アフリカ・家政・生活改善・2019年度派遣)

募集中のお題

「通勤」「歯みがき」「お風呂」「食器洗い」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

日本野球機構が「ベースボール型授業の指導用教材」を公式サイトで公開

一般社団法人日本野球機構（NPB）は、ベースボール型授業の指導用教材「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」をNPB公式サイトにて公開しました。

本教材は、小学校3年生から6年生まで「ベースボール型」授業の単元計画案、学年ごとの授業の進め方などをわかりやすいイラストを用いて丁寧に説明したもので、JICA海外協力隊員の希望者にも派遣前訓練時に配布をしています。今回のサイト公開にあわせ、新型コロナウイルス感染予防を考慮した指導のポイントも新たに掲載されました。さまざまな場面で、ぜひ活用ください。

▶NPB公式ウェブサイト「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」
<https://npb.jp/promotion/pe-lesson/>

※指導用教材の本文または写真などを転載・転用する場合には、事前の申請が必要になります。詳細はNPB公式サイトをご参照ください。

JICA関西がオンラインでJICA海外協力隊トークライブを開催

6月にオンライン上で全5回に渡り「現役JICA海外協力隊員と共に、これからの国際協力を考える」と題したトークライブを開催しました。登壇したのは、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、活動半ばで一時帰国したJICA海外協力隊員、合計18人。活動体験の発表やトークセッションが行われ、登壇者はいずれも派遣国に対する熱い想いを語り、前を向いて進もうとする強い意志を示しました。同ライブには延べ500人以上が参加し、「一時帰国を強いられたにもかかわらず、明るく前向きな一時帰国隊員と接することができ、自分自身にとっても何事にも前向きに取り組む元気をもらえた」という声も寄せられました。



トークライブの登壇者たち

オンライン帰国後研修の実施と今後の開催予定

6月20、21日にオンラインで帰国後研修を実施し、合計64人の帰国隊員が参加しました。今後のキャリアを考えるうえで重要となる自己理解をメインとした研修で、隊員同士が意見交換する時間も盛り込まれたことから、参加者より高い評価を得ることができました。

今回は、8月8日（土）～10日（月）の3日間（午前と午後各1回の計6回、1回3時間）の開催を予定しています。隊員同士の意見交換による協力隊経験の振り返りの部分を充実させ、より質の高い研修をオンラインで目指します。詳細は以下にお問い合わせください。

▶青年海外協力隊事務局人材育成課 帰国ボランティア進路支援5
jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

熊本県立大学の大学院入試のご案内

熊本県立大学（白石 隆 理事長）では、熊本県とJICAの連携協定を踏まえ、大学院教育においても、海外体験（国際協力・貢献活動）と専門教育を組み合わせ、地域のグローバル化に貢献できる高度グローバル人材を育成します。また、既に海外でJICA海外協力隊や他のボランティア活動等を経験された方に対しては特別な入試制度（大学院博士前期・社会人特別選抜〈国際協力枠〉）も用意しています。大学院プログラムに国際協力・貢献活動を含める、一般選抜（国際協力枠）型と合わせて、極めて画期的な国際協力人材育成プログラムになります。詳細はウェブサイトをご覧ください。

■対象：A＝概ね2年間の国際協力・貢献活動の経験がある方のための入試制度（社会人特別選抜〈国際協力枠〉）

B＝原則3年間の大学院在学中に、海外において国際協力・貢献活動を経験する方のための入試制度（一般選抜〈国際協力枠〉）

■募集要項配布：令和2年（2020年）7月上旬

■募集期間：令和2年（2020年）7月下旬以降順次

▶熊本県立大学ウェブサイト「高度グローバル人材育成」

<https://www.pu-kumamoto.ac.jp/news/detail.php?id=1041>

クロスロード

令和2年8月号【第56巻第7号 通巻659号】
 発行日 令和2年8月1日

編集・発行：
 独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
 竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での「失敗」談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしております。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 日本でつくれる派遣国レシピをお寄せください。

隊員めし

おかわり!

日本でつくる現地の「めし」は活力の源



隊員's ポイント!
好みの味付け(ショウガやオイスターソースなど)で自分の味を!

派遣国の料理屋に行ったとき、メニューを見て一番安い価格帯の列に並んでいた「地三鮮(ディサンシエン)」という名前から「大地の三つの新鮮なもの」とは何かと興味を惹かれて注文。ひとくち食べて思ったのが「この値段(15元(約225円))で、このおいしさ!」でした。中華料理に興味があったのですが、つくり方が難しかったり、材料が任地で揃わなかったりして、なかなかつくれずにいました。「地三鮮」は、完成品から食材が身近に感じたので、見よう見まねでつくってみることにしました。私の任地である中国の東北地方は、ニンニクをふんだんに使った料理が多いようで、このレシピにももちろん入っています。

現地の食べ物を好きになれたというのは、健康的な生活を送る上で非常にラッキーでした。自分では店のような深いコクは出せませんが、それでもつくってみると、派遣国のことを思い出すことができます。

今月の料理人



こいとひでき
小糸英樹さん(中華人民共和国・日本語教育・2015年度3次隊)
●活動内容:遼寧省瀋陽市の中高一貫校で現地教員とともに日本語教育を行う。

ニンニク多めの野菜炒め 中国東北地方の「地三鮮」

材料(1人分)

ジャガイモ…2個
ナス…1本
ピーマン…3個
ニンニク…1〜2かけ
サラダ油…大さじ2
砂糖…大さじ1
醤油…大さじ1
鶏がらスープの素…小さじ1〜2
片栗粉…小さじ1(大さじ1の水で溶く)
ゴマ油…小さじ1(なくてもOK)
花椒(ホアジャオ) ※…適量(なくてもOK)
※中国のスパイス。ピリピリと痺れるような辛味がある。山椒(サンショウ)でも代用できるが、花椒の方が辛味が強い。

つくり方

- 1 ニンニクを細かく刻む。
- 2 ジャガイモ、ナス、ピーマンを一口大に切る。
- 3 フライパンに油を敷き、ジャガイモを炒める。中まで火が通り、表面に色が濃くつく程度までしっかり炒め、一度取り出す。

- 4 フライパンに残っている油を使ってニンニクを炒め、香りが出たらナスを入れる。
- 5 ③のジャガイモを入れ、砂糖と醤油で味を整える。花椒は好みで入れる。
- 6 ピーマンと鶏がらスープの素を入れて炒める。
- 7 水に溶いた片栗粉を入れ、ゴマ油を垂らせば、出来上がり!

ひとくちメモ

野菜は油で揚げてから炒めるのが主流のようで、現地の料理屋で食べていた地三鮮も揚げた野菜でした。しかし、揚げなくてももしっかり炒めれば、近い味になります。



主な材料はこれだけ!

② ジャガイモはしっかり炒め、中まで火を通す



今月号の表紙 ネパール



なぎらたいき
文=柳楽大気さん
(公衆衛生・2017年度1次隊)

合言葉は「ミチミチー」。ネパール語で「ゴシゴシ」を意味します。各地で行った衛生教育の最後はいつもみんな「ミチミチ」と唱えながら手洗いをしていました。せっけんが置かれるようになった学校の水場で、競い合うかのように楽しみながら手を洗う子どもたちの姿を見るときは、こちらも笑顔になりました。写真は、上級生が下級生に手洗いのやり方を教えているところです。手洗いは衛生管理の基本。今も任地では、小さな先生たちが「ミチミチ」と手洗いを広めてくれています。